

129  
127

館書圖京東				
一	二	一	二	
冊	號	架	函	類

皇朝通志

自  
二十  
至  
廿二

廿五	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	枚目	卷二十
表	同	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	丁目	
一	二	三	八	六	八	二	五	八	一	五	六	八	誤	
恭	泣	母	書	號	醫	舉	二	矢	東	恭	東	居	君	
賢	然	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	夫	
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	人	
泰	泣	母	書	強	匡	舉	二	矢	東	泰	東	君	正	
賢	然	ハ	ハ	記	補	止	戰	ト	勻	賢	勻	夫	人	
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	人	
同	同	廿	廿	二十	十	同	十	八	六	同	四	枚目	卷廿一	
同	裏	同	同	表	裏	同	同	同	表	裏	表	丁目		
九	二	二	六	八	五	一	二	一	八	吉	一	五	誤	
焉	焉	垂	敷	柳	天	改	泰	泰	浴	則	遠	威	問	
感	藩	復	養	氏	下	ム	亮	亮	務	皆	江	問	誤	
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	誤	
爲	爲	無	數	柳	天	攻	泰	泰	俗	則	遠	威	正	
感	藩	復	卷	民	保	ム	亮	亮	務	智	近	問		
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ		
三	同	廿	廿	廿	廿	十六	八	七	枚目	卷廿二				
十	裏	同	表	裏	同	同	同	表	丁目					
裏	二	同	四	一	古	九	由	一	誤					
笑	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	耶	
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	耶	

久留米小史卷之二十

四 循 吏

循吏の春 林公瓊林公ノ時長谷織部粟生彌右衛門等ノ偉才  
 ナリ其後 數代ノ間學織アルノ士ニ乏敷特ニ俗吏ノ一藝一  
 能ハレハアリレナラシ然レモ未タ其名ヲ聞カス大良  
 公ノ時ニ至リ島田丹右衛門中川又太郎郡官ユテ争々ノ名  
 アリ田代守次權變智數財政ニ長レ田中常右衛門温籍簡率  
 吏務ニ長シ小森田佐内梯新平山鹿治太夫堀江茂七郎森山  
 武右衛門等皆有爲ノ人才ナリ

船曳鐵門校正

戸田 幹編纂



長谷織部

長谷織部丹波ニ於テ春林公ニ仕フ元和七年久留米ニ於テ  
 二百三十石ヲ賜フ八年七十石ヲ加フ九年先手物頭ニ班ス  
 鐵砲十人預ケトナリテ鐵砲知三百石ヲ賜フ十三年鐵砲知  
 百石ヲ加フ嶋原ノ亂ニ際レ寛永十四年十一月有馬壹岐有馬  
 内記ニ隨行肥後高瀬ニ行キ監軍ノ節度ヲ受ク後嶋原ニ出  
 張ス父死亡後跡知ノ内百石ヲ加フ四百石トス鐵砲知四百  
 石合レテ八百石トス承應四年瓊林公東觀ノ海路備前摺田  
 浦ノ變死アリレ時國老有馬監物有馬壹岐ニ隨行レテ江戸  
 ニ行ク蓋レ嗣君幼ナルヲ以テナリ寛文十二年九月歿ス  
 栗生彌右衛門ハ瓊林公ノ時祿二百石ヲ食ム正保元年異國  
 船ノ長崎ニ來ル長崎奉行馬場三郎右衛門ヨリ報知アリ藩  
 議既ニ出兵ニ決セリ彌右衛門獨リ出兵ハ猶豫アリタレント

栗生彌右衛門

島田丹右衛門

請ヒ自ラ奉行ニ見エ近國ノ諸藩既ニ當港へ出兵セシテ以  
 テ我藩ニテハ隣國ノ警戒ニ備ヘテハ如何ト且久留米藩ニ  
 テハ兼テ海岸ナキヲ以テ船ノ備モ整ハサルモ若シ船橋ノ  
 用モアラハ唐船碇百個莠綱百個棒二百本城樓船三艘ハ準  
 備セシテ以不時ノ需メニ供スルアラント奉行馬場三郎右  
 衛門大ニ感服シ幕府へ上申アリ幕府之ヲ好ミスト云彌右  
 衛門ハ久留米ニ報知シ品物ノ準備ヲ促セリ彌右衛門功ヲ  
 以テ同二年祿百石ヲ加フ  
 嶋田丹右衛門寛政二年跡目相續三百石馬廻組トナリ五年  
 郡奉行ニ任ス文化四年馬廻組頭格ニ班ス五年郡上奉行先  
 手物頭格ニ進ミ十年關東川々普請手傳ニテ郡中畝掛銀人  
 別銀ヲ召集セシ勞ヲ以テ銀二枚ヲ賜フ筑後川口海上ノ漁

塲肥前人ハ筑後人ヲ殺シ争論結ンテ解ケヌ丹右衛門ハ出  
訴一件ニテ十三年正月江戸ニ趣ク九月再ヒ江戸ニ趣ク後  
ナ幕吏來リ文政三年ニ至リ立花氏中裁ニテ事件落決セシ  
ヲ以テ上下一具銀五枚ヲ賜フ五年關東川々手傳落成ニテ  
銀二枚ヲ賜フ老年マテ武藝心掛出精ニ依リ上下ヲ賜フ八  
年用人見習格役料金拾五兩ヲ賜フ天保十一年軍製方取調  
出精ニ依リ褒詞アリ嘉永三年四月十二日歿ス

中川又太郎

中川又太郎文化六年跡目相續祿百三十石馬廻組タリ十二  
年作事奉行ニ任ス文政元年郡奉行ニ轉ス十年郡上奉行ニ  
進ミ先手物頭格ニ班ス天保十四年徒士頭格ニ昇リ弘化四  
年七月六日歿ス又太郎政事ノ才ヲ抱ケリ當時未タ公事方  
ノ設ケナキヲ以テ重罪ノ裁判等ハ三奉行郡奉行町奉行ノ關

田代方綱

轄タルヲ以テ又太郎ノ裁判スル判決流ルカ如シト云フ  
田代方綱守次ト稱ス寛政十年名代家督相續ス四百石馬廻  
組タリ享和二年作事奉行ニ任ス文化八年大扨性格惣奉行  
附添役ニ轉ス九年奥詰トナリテ大坂ニ一番ス十二年大坂  
ニ勤番ス十四年伏見ニ於テ使番格ニ進ム數度勝手方用ニ  
テ登坂セリ文政八年大坂ニ於テ側物頭格ニ進ム九年用人  
見習格タリ天保八年參政ニ登ル弘化二年格祿ヲ奪レタリ  
方綱爲人智數權變深ク財理ニ通セリ我藩中ノ紙幣百餘年  
來發行セウレシモ金銀ノ準備ナキヲ以テ往々澁滞ヲ醸シ  
上下困難ニ陥リ如何モスヘカラサルヲ以テ斷然計畫ヲ設  
ケ藩内ノ産物蠟紙等ヲ農商ヨリ大坂へ輸出セシメ同所ニ  
テ賣拂ヒ其代金即チ正貨ヲ藩ニ積ミ置キ農商ニハ蠟紙等

田中保成

賣却ノ代價ハ代リ紙幣ヲ與ヘタリ且ツ產物方ニテハ日々  
 正貨五拾兩ヲ現今發行ノ紙幣六拾八匁正貨金壹兩ニ相當  
 スヘキ極メナレモ六拾五匁ニテ引換ルノ計畫ヲ設ケシテ  
 以テ爾來紙幣通用留滯セス上下永ク便益ヲ得ルモノ方綱  
 ノ功ト稱セサルヲ得ス安政四年四月廿九日歿ス  
 田中保成常右衛門ト稱ス松岡某ノ二子ニシテ田中成倫ノ  
 養子ナリ田中氏祖先ハ本國ノ先領主田中吉政ノ戚族ニシ  
 テ祿一万石ヲ食ム吉政亡滅後本藩ニ仕ヘ祿三百石ヲ食ム  
 傳ヘテ保成ニ至ル保成檢見奉行タリ四十餘年一日ノ如シ  
 勉厲人ニ過ク事ヲ處スル衆ト共ニシ敢テ自ラ專ラニセス  
 性溫籍簡率恭謙禮讓アリ忠信隱サス家ヲ治ル法アリ驕奢  
 ナ好マス一家敦睦疾言遽色ヲ見ス又絶テ愛翫スル所ナシ

飲色衣服諸具時ニ用ニ供スルニ足ルノミ祁寒ト雖室唯一  
 火盆アルノミ廣ク人ヲ愛シ施ヲ好ム親族僕婢ノ爲メ資産  
 ナ分ナ之ヲ救フ者許多ナリ文政二年馬廻組頭格ニ班ス十  
 二年銀若干ヲ賜フ天保十一年先手物頭格ニ進ミ嘉永七年  
 中小性頭格ニ進ミ此ヨリ先比年老ヲ以テ屢致仕ヲ乞フ許  
 サス萬延元年八十九病ヲ以テ致仕ヲ乞フ官優命之ヲ許  
 ス依テ衣服ヲ賜ヒ之ヲ賞ス慶應二年正月十九日病歿ス享  
 年九十有六寺町千榮寺ニ葬ル保成幼ニシテ學ヲ好ミ篤ク  
 程朱ノ學ヲ信ス嘗テ物徂徠ノ論語徵ヲ讀テ曰ク聖人ノ道  
 修身治國ヲ以テ本トス何ソ必ス論難誹謗以テ教トセン又  
 本居宣長ノ著書ヲ評シテ曰罵詈訾ヲ爲ス余ノ取ラサル所  
 ナリ晚年好シテ莊子ヲ讀ミ發明スル所アリ壁間常ニ莊周

ノ畫ヲ掲ク又飲ヲ愛シ深醉ニ至ラス旁ヲ圍碁ヲ好ミ人ト  
對局輸贏ヲ競ハス終日倦ヲ知ラス保成ノ德ト壽ト實ニ一  
辭ノ景慕スル所ナリ保成七十五歳ノ時謔歌アリ

御思 澤七十五歳 檢見奉行 田 畦 廻達 者 自 滿  
ゴオククデ シナウゴサマデ ケミフギウレ タノクマワリテ タシヤシマデナル  
コレヲ保成ノ結歌ト云

小森田佐内

小森田佐内ハ樺嶋三右衛門ノ三男ニシテ小森田勘四郎ノ  
養子ナリ中小性雇文化七年中小性ニ班シ作事方目付タリ  
十一年吟味監察タリ天保十四年廩米八十石ヲ賜フ性眞率  
樸直吏事ニ幹タリ嘉永三年十二月十二日歿ス

梯處方

梯處方新平ト稱ス文化十三年側監タリ文政七年廩米八十  
石ヲ賜フ天保十一年三十石ヲ加賜ス處方吏務ノ傍ヲ書及  
ヒ和歌ヲ善クス長男豊太奥右筆タリ二男達二亦ク側監タ

山鹿重親

リ皆ナ書ヲ善クセリ其辭世ニ曰ク  
おもはひ了七十路あま初形からゑて  
今ハ此世ヲ殘ハおもまき

山鹿重親治太夫ト稱ス文政二年藏目付タリ三年物産ノ工  
業ヲ起シ堀江茂七郎ト相勤タルヘキ旨命セラレタリ同八  
年側監タリ天保十年江戸ニ於テ廩米八十石ヲ賜フ弘化二  
年義源公ノ時官制改正アリ建白書ヲ奉レリ四年江戸赤羽  
邸ニ於テ居夫人徳川氏婚嫁ニヨリ新殿ノ建築ニ從事厲精  
セシテ以テ衣服金品ヲ賜フ嘉永五年同僚小森田甚三郎眞  
木黨ノ謀議ニ加盟セルニ連坐シ同僚野村百右衛門一同貶  
黜セラル文久二年三十石ヲ加賜ス重親爲人廉直事ヲ處ス  
ル致密ナリ重親壯歳ヲ過キ妻ヲ娶ラス母子清潔ヲ好ミ室

堀江茂七郎

内庭前ニ至ルマテ日々灑掃セルヲ以テ樂トセリ慶應二年九月二十二日歿ス年七十二

堀江茂七郎寛政三年俸米三人口ヲ賜フ七年中小性吟味監察タリ物産用兼帶文政九年明善堂講釋方ニ轉ス天保九年廩米八十石ヲ賜フ万延元年歿ス其吟味監察タル專ラ殖産興業ノ事ヲ擔任セシモ速カニ事功ノ舉ラサルヲ以テ終ニ譴責ヲ得タリ然レモ山林ヲ繁茂セシムル如キハ永年ヲ期セサルベカラヌ茂七郎ノ功猶味歿スベカラサルモノアリ森山安智武右衛門ト稱ス森山利作ノ第四子ナリ寛政十二年二月十九日莊嶋小路ニ生ル壯年ニシテ武技ヲ嗜ミ尤モ砲術ニ精レ文政六年惣奉行附目付ノ定付タリ義源公ノ時ニ至リ足輕目付組頭タリ專ラ改革事務ニ從事シ儉令ノ人

森山安智

民ニ普及シ公薨去後ニ至リシモ一般質素ノ風ヲ成セシモノ安智等ノ力居多ナリ安智爲人率直事ヲ處スル緻密ナリ萬延元年徒士並ニ任シ明治元年徒士組ニ進ム十二月二十四日歿ス年六十九

文學

文學ハ瓊林公ノ時菊池東句ヲ聘シ祿五百石ヲ賜フ靈源公ノ時眞部仲菴ヲ聘シ祿四百石ヲ賜ヒ儒醫トス慈源公ノ時中村信齋ヲ聘シ月俸三十人口ヲ賜フ其後長沼宗敬入江平馬等ヲ聘シ兵學師儒學師トス梅巖公ノ時ニ至リ伊藤長準湯川丙次等ヲ聘シ合原餘修ヲ登庸シ法令ヲ制定ス長準丙次ハ世子ノ侍讀ニ任ス餘修ハ後退隱ス大慈公ノ時ニ至リ再ヒ登庸シ侍講トス高山一之專ラ朱子學ヲ唱フ登庸シ儒

官トス大乗公ノ時左右田尉九郎ヲ聘シ祿百五十石ヲ賜ヒ  
大小性格トシ教授ニ任ス權嶋石梁ハ紀平洲ノ高弟ニシテ  
古學ヲ唱ヘ學德兼備教授ニ任ス下士ヨリ側物頭格ニ累進  
シ祿百五十石ヲ賜フ建議明善堂ヲ創立シ專ラ教育ニ從事  
セリ是ヲ以テ國老ニハ有馬照長有馬恭賢等ノ賢大夫ヲ出  
シ其他梯箕嶺安元節原岡永蘭州池尻葛覃佐田竹水等ノ諸  
儒輩出セリ悉ク石梁ノ薰陶ニ出テサルハナシ本莊星川ハ  
古賀精里ノ門人ヲ以テ專ラ朱子學ヲ唱ヘ石梁ノ後ヲ繼キ  
助教授ニ任シ教育ニ從事セリ大良公ノ文政八年文武ハ追  
々命令アルヲ以テ武術ハ振起セシモ文道ハ兎角振ハス文  
武ハ士人ノ常事ナルヲ以テ偏廢スベカラストノ命アリ天  
保末年ニ至リ義源公世子ヲ以テ學ヲ好マセラレ本莊星川

岡永蘭州野崎習堂等侍讀ニ任シ專ラ輔導ノ道ヲ盡セリ公  
襲封ノ時ニ及テ村上士精野崎習堂專ラ中興ノ業ヲ輔佐ス  
公中道ニレテ相館セラレシヲ以テ遂ニ其力ヲ施ス能ス士  
精ハ嘗テ水戸會澤正志ノ門ニ遊ヘリ同時ニ眞木紫灘木村  
赤村等亦正志ノ門ニ遊ヒ得ル所アリテ歸リ專ラ士大夫ヲ  
教式ス頗ル有爲ノ才ヲ出セリ此時ノ學派ヲ稱シテ天保學  
トス對鷗公ノ時ニ至リ黨派軋轢ヲ以テ盛衰消長人才蕩盡  
セリ國學ハ大慈公ノ時尾關正義不破守直ヲ師トシ本居宣  
長ノ門ニ入り專ラ國學ヲ唱フ其子傳次郎小川志純矢野一  
貞等輩出シ和歌ニテハ宮崎信教船曳大滋眞木紫灘等振起  
シ大滋ノ弟船曳鐵門ハ國學和歌ヲ兼其名遠邇ニ聽ク年古  
稀ヲ踰コモ專ラ教育ニ從事セリ



菊池東句

菊池東句博學ノ人ナリ瓊林公ノ時祿五百石ヲ食ム陶淵明  
集及圓機活法ノ跋文ヲ書ス其名海内ニ著ル

合原餘修

合原餘修藤藏ト稱ス窓南ト號ス三潯郡住吉村ノ人ナリ本  
姓ハ草野氏發心城主右衛門督鎮永ヨリ出ツ生テ穎悟自  
書ヲ讀ムコトヲ好ミ年十一佛氏ニ歸ス四方ニ遊歴シ後法  
衣ヲ脱シ淺見安正ノ門ニ入り專ラ儒學ヲ修ム改メテ今名  
ヲ稱ス講學愈篤ク礪行益精ク名一時ニ震フ吾藩宋學ノ嚆  
矢トス寶永六年梅巖公俸ヲ賜ヒ學ヲ藩士ニ授ケレム生徒  
日ニ夥シ居ル十餘年致仕シ居テ上妻郡馬場村ニトス國老  
以下諸士追隨道ヲ問フ者絶エス僕徒門ニ填ツ大慈公ノ時  
延テ侍講トス更ニ廩米二十口ヲ賜フ竹間格ニ班ス又其老  
ヲ優シ籃輦ニ乘リ登城シ帽ヲ冠リ寒ヲ禦クコトヲ許ス蓋

湯川丙次

異數也元文二年八月二十日歿ス年七十五住吉村ニ歸葬  
ス碑面題シテ合原窓南之墓ト云フ蓋遺命ニ從フナリ餘修  
最モ性理易學ニ精シ鬼神說魂魄論等ノ著アリ世ニ行ハル  
其馬場村ニ在ル我藩ト柳川藩ト境川ノ水害除キノ爲メ互  
ニ隄防ヲ固メ彼一層高ク築ケハ我亦一層ヲ高クシ競争盡  
ル期ナケレハ國老有馬河内ヨリ餘修ノ意見ヲ問レレニ餘  
修曰ク以テ大事小者樂天者也以テ小事大者畏天者也ト孟軻論  
セラレレテ以テ篤ト賢考アリタレント申セシテ以テ藩ヨリ  
ノ隄防ノ建築ヲ停止セレニ柳藩ニテモ着手ノ建築ヲ停止  
セレテ以テ双方ノ爭論ハ自然ト消盡セリト云  
湯川丙次ハ京師ノ人ナリ業ヲ伊藤仁齋ニ受ケ梅巖公ノ時  
我藩ニ筮仕ス月俸三十人口ヲ食ム大慈公ノ侍讀ニ任ス梅

伊藤長準

巖公厲精治ヲ圖リ庶政ヲ更張ス法度號令丙次ノ草定スル所多レ爲人豪宕卓犖有用ノ器ニレテ區々章句ノ儒ニアラス元文中致仕シ著書東軒漫錄等數種アリ伊藤長準平藏ト稱シ竹里ト號ス仁齋ノ第四子ニレテ頗ル家學ヲ受ケ所謂五藏ノ一ナリ梅巖公ノ時我藩ニ益仕ス世子頼徨公ノ侍讀マリ

長沼宗敬

長沼宗敬三左衛門ト稱シ膽齋ト號ス信濃松本ノ人ナリ性篤實ニレテ實學ヲ修メ言行方正識量人ニ過ク父母ニ孝アリ好シテ和漢ノ兵書ヲ講シ竟ニ其蘊奧ヲ極メ兵要錄若干卷ヲ著ス一家ノ兵法ヲ祖述ス其徒弟殆ント千人ニ及ヘリ又菊亭家ノ書式ニ熟達シ終ニ我藩ニ益仕シ祿二百五十石ヲ食ム後去テ播磨明石藩ニ仕ヘ復タ去テ山城伏見ニ終ル

宮川忍齋

宮川忍齋若狹小濱ノ人ナリ延寶年中我藩ニ來リ三瀨郡大石村ニ居シ儒學ヲ好シ兼テ和歌ノオアリ兵學ヲ長沼膽齋ニ學ヒ其蘊奧ヲ得タリ兵要錄ノ脱編守國守城海防ヲ補述ス弟子若干人アリ常ニ好シテ和漢ノ歴史ヲ涉獵シ關原記大全ニ戰錄勇功記ヲ著述セリ後年筑前ニ轉居シ盲トナシ關原記大成浪速攻戰錄ヲ編纂セリ

入江脩

入江脩平馬ト稱シ保叔ト字シ寧泉ト號ス江戸本郷ノ人ナリ曩祖入江右馬允駿河江尻郷ヲ領シ入江ノ莊ニ住ス故ニ世々入江ヲ以テ氏トス其父宗喜明石藩ニ仕フ平馬モ亦父ノ跡ヲ繼ク後儒術ヲ以テ我藩ニ仕フ祿二百石ヲ食ム博學多識山鹿流兵法ヲ學ヒ又天文曆數算術及量地ノ術ニ通曉シ天經或問註解神武精要等ノ著述アリ

高山一之

高山一之金次郎ト稱シ畏齋ト號ス筑後國上妻郡人ナリ家世々農ヲ業トス一之生レテ狀貌奇偉幼ニシテ舉正凡兒ニ異ナリ稍長シテ慨然古ヲ好ミ而シテ草野寒鄉字ヲ識ル者ナシ時ニ醫生郷吏ニ從ヒ學フ家極メテ貧ニレテ油ヲ買フ資ナシ毎ニ村祠ノ常燈ニ就キテ書ヲ讀ム偶大坂留守某ノ著書ヲ看テ奮ツテ曰ク是レ吾師也遂ニ適テ之レニ從フ凡居ル十旬平生ノ積疑一朝氷釋ス某試ミニ一之ヲレテ大學ヲ講セシム某乃大ニ喜ンテ曰吾カ學ニ人ヲ得タリ然レモ一之ハ父母老タルヲ以テ久シク留ルコト能ハス某別ニ臨ミ悵然序文ヲ作り之ヲ贈レリ且勸ムルニ道ヲ京畿ニ唱フルヲ以テス一之已ニ歸リ弟子日ニ進ミ齡五十ヲ踰エ刻苦已マス猶再遊ノ志ヲ懷ケリ而シテ我藩命レテ儒員トス因

テ城南館舎ニ移居ス學徒愈多シ幾ハクナラスレテ病ニ罹リ寶ヲ易フ實ニ天明四年七月十七日ナリ享年五十有八津江村花宗川瀝ニ歸葬ス已ニシテ其徒水害ヲ慮リ寛政二年春三月ニ至リ更ニ村西平松岡ニ葬ル一之天資高明溫厚雅樸其人ニ接スル公平殊ニ城府ヲ設ケス其學篤ク洛閩ノ說ヲ信シ最モ教導ニ長ス門人業ヲ受ル者枚々倦ヲ知ラス數年間闔郷翕然學ヲ起シ今ニ至リ郷俗淳厚ナル者ハ一之ノ遺澤ナリト云

今村義勝

今村義勝幼名ハ忠次郎ト稱シ後直内ト改メ竹堂ト號ス父ハ三原志津摩母ハ矢加部氏寶曆十三年十二月八日御井郡府中驛ニ生ル幼ヨリ穎敏長スルニ及ンテ高山畏齋ニ師事ス後テ京師ニ遊ヒ西依成齋ニ從學ス業已ニ成リ郷里ニ歸

リ諄々生徒ヲ教育ス幾クナク病ニ罹リ上妻郡新莊村寓舎ニ歿ス實ニ文化二年三月二十一日ナリ壽四十有三三日ヲ越エ御井郡府中驛西隈山先塋ノ側ニ葬ル

左右田尉九郎

左右田尉九郎ハ肥後山鹿郡人ナリ備學ヲ以我藩ニ筮仕シ祿百五十石ヲ食ミ大小性格ニ班ス寛政八年明善堂ノ創立スル權嶋石梁ト共ニ教授トシテ專ラ學政ヲ修メ士大夫ヲ教式セリ享和元年歿ス

廣津省

廣津省善藏ト稱ス有修ト字ス藍溪ト號ス其先ハ薩摩人賢永巳丑五月五日我筑後ニ生ル考ヲ弘直ト曰フ農ヲ業トス省幼ニシテ讀書ヲ好ミ年二十郡曹召シテ下吏トス後儒學師員タリ弟子滿室國校初テ建ツ省與リテカラアリ天明中小小性ニ班ス寛政六年十一月十三日歿ス年八十六省初メ

宋學ヲ宗トス後服南郭ニ從ヒ復古ノ業ヲ問ヒ晚ニ見ル所アリ論語問讀書論ヲ著シ自ラ一家ノ學ヲ成セリ大意以爲ク堯舜孔子ノ道宅ナシ獨恭謙遜讓ニ在リ所謂忠恕ノミ所謂孝弟ノミ其見如是踐履知ル可シ省精力人ニ過ク其讀書數晝夜ヲ連テ倦マズ疾ヲ床ニ在ルト雖手卷ヲ廢セス其職ニ在ル凡ソ人ノ苦ンテ堪ヘサル所獨奮テ之ヲ爲ス初メ吏トナリシヨリ奉職六十七年毎ニ賞賜ヲ得タリ篤實克勤ヲ以テ之ヲ褒ス恒ニ人ニ語テ曰ク人ノ世ニ在ル物トシテ不可ナルナケレハ物トシテ不善ナルナシ故ニ其憂フ可キノ事ト雖モ必ス推シテ之ヲ轉シ必ス稱シテ難有ト云難有トハ感喜ノ詞ナリ嘗テ百金ヲ人ノ爲メニ亡フ是レ其平素節儉ノ生スル所意著書ヲ梓スルニ在リ人或ハ之ヲ吊ス對

宮原存

テ曰ク難有我人ニ虧カサルナリ行テ暴風雨ニ逢フ曰難有  
矢石ニアラサルナリ其宅推シテ知ル可レ故ニ平居絶テ戚  
容アルコトナレ優遊以テ世ヲ終レリ  
宮原存半左衛門ト稱シ南陸ト號ス父ヲ金太夫ト稱ス國老  
岸氏ノ臣ナリ存家ヲ治ムル法アリ親ニ事フル孝ナリ父酒  
ヲ嗜ム家ニ僮僕ナレ毎夜市ニ走り酒肉ヲ沽フテ以テ供ス  
室家之レニ化ス穆如タリ爲人詳慎端嚴事体ニ達練シ其主  
三世ニ歷事ス世々醫補ノ勞アリ心ヲ讀書ニ專ラニ晝誦  
夜思惟日足ラス尤訓迪ニ善シ其書ヲ講スル本末課アリ博  
ヲ出テ約ニ歸ス懇欵周折務テ實踐ニ在リ夫ノ空論世ヲ驚  
ス者ヲ見レハ甚タ之ヲ惡ミ門人少長トナク咸ナ相戒メ畏  
レ且ツ業ヲ樂レマサルナシ晩年ニ至リ從弟益衆シ凡ソ藩

人ノ學ヲ以テ世ニ著ルモノ多クハソノ門ニ出ツト云フ  
家臣ヲ以テ命シテ經テ府學ニ説キ歳ニ白銀ヲ賜フテ破格  
ニアリ闔鄉榮トス享保元年八月十五日生ル寛政四年六月  
十一日病歿ス壽七十有七寺町眞教寺ニ葬ル  
津山懋伊平太ト稱シ德郷ト字ス東溟又斗龍ト號ス國老有  
馬右近ノ臣ナリ性溫籍簡率世務ヲ事トセス唯學自ヲ樂シ  
ム尤モ詩文ニ敏ナリ長篇大章ト雖モ筆ヲ下セハ立トコロ  
ニ成ル其巧拙ニ於テハ甚タ意ヲ置カヌ要スル自適ニ在リ  
性酒ヲ飲マス雅筵ニ逢フ毎ニ驩ヒ酒ヲ飲ムヨリモ深シ小  
官ニシテ遠遊ヲ得ス歎シテ曰ク吁富嶽人ヲ容レス子弟過  
ナアリ戒メテ曰ク吾罪子ノ罪ニ非ス時ニ芭蕉氏ノ言ヲナ  
シテ以テ自ヲ喜フ笑テ曰ク道瓦礫ニ在リ其人トナリ推ス

可キナリ府學建ツ懋家臣ヲ以テ命シ入テ經ヲ藩士ニ授ク  
而シテ主家モ亦タ其義ヲ善シ優待シテ學ヲ遂ケシム並ニ  
異數ト云フ後テ疾アリ然レモ恒ニ書策ヲ環シ吟哦廢セス  
欣々如タリ一日夙ニ興キ沐浴部帙ヲ閱シ諸稿ヲ整ヘ出テ  
墓地ヲ視及ヒ公私大小遺言漏サス曰ク我今世ニ休ヌ家人  
信セス夕ニ至リ疾果シテ漸ス忽焉起キヌ享和元年十二月  
二十八日ナリ享年五十八瀬下町西岸寺中前跡ル所ノ地ニ  
葬ル

樺島公禮

樺嶋公禮勇七ト稱シ世儀ト字シ石梁ト號ス久留米ノ人ナ  
リ幼ヨリ學ヲ好ミ長スルニ及シテ經史百家ヨリ稗史小説  
ニ至リ博涉セサルコトナシ詩文ハ勿論旁ヲ國歌ヲ好ミ旅  
行ノ記往來之芝アリ天明四年江戸ニ遊ヒ紀平州ノ門ニ入

リ古學ヲ修ム八年俸ヲ賜ヒ中小性ニ列ス國校ノ創立スル  
公禮ニ命レ其事ヲ掌ラシム尋テ教授タリ祿百三十石ヲ賜  
ヒ側物頭格ニ進ム文政十年十一月晦病歿ス享年七十有四  
就仕ヨリ易寶ニ至ルマテ四十年間江戸ニ在ル過半大慈公  
ノ内寢ニ講經レ雄心寬明二公子ニ侍讀レ大乘公ノ時ニ及  
ヒ寵遇最モ重ク頻リニ召レテ書ヲ講レ又國事ヲ謀ル迎ル  
ニ肩輿ヲ以テス歿スルニ及ンテ悼惜殊ニ甚レ識度卓偉未  
タ嘗テ疾言遽色セス雅ニ言フ人恕ナカル可カラヌ故ニ其  
ノ人ヲ禮スルニ答ヘサレハ寬貸貴メス弟子過ナアレハ從  
容風論ス悔悟レテ志ヲ厲マサレハナレ常ニ人ニ作文ヲ  
勸メテ曰ク書ハ皆文也古書ヲ讀マント欲セハ自ラ文ヲ作  
ルニアラサレハ則テ其妙境窺フヘカラス學ニ於テハ則テ

一ニ師訓ヲ守リ門戸ヲ建ツルヲ喜ハス窮理說ノ如キ甚ク  
 遵奉セスト雖モ學ンテ聖人タリ及ヒ氣質變化ノ言ニ至リ  
 テハ深ク信レテ疑ハス齒德既ニ高ク聲望益隆シ當時ノ諸  
 藩待ツニ賓禮ヲ以テスルノ數多シ招キニ應レ再ヒ長府ニ  
 往ク列藩貴族ノ間ヲ周旋シ而レテ補フヘキコト蓋シ少ナ  
 カラス自ツ奉スル極メテ薄ク親族朋友急難アレハ財ヲ棄  
 テ賑救ス毫モ得色ナレ是ヨリ先キ我カ藩ノ學風陋陋故ニ  
 書ヲ讀ム者動スレハ武弁俗吏ニ鄙レマル然ルニ文教大ニ  
 興リ人々文事ナキニ至ル者實ニ公禮ノ力ナリ我カ藩ノ備  
 宗ト謂ハサルベケンヤ其歿スルヤ國知ルト知ラサルト  
 追慕セサルハナレ著ス所文集前後篇久留米誌及ヒ雜著若  
 干篇アリ樺嶋孝繼小助ト稱ス蓮溪ト號シ樺嶋三右衛門ノ

二男ニシテ公禮ノ養子タリ能ク家學ヲ繼キ文化十三年竹  
 ノ間組ニ班レ二十石三人口ヲ賜フ文政九年大小性格ニ進  
 ミ十一年教授助ニ任ス天保五年使番格ニ進ム十月廿六日  
 歿ス享年五十有九

梯隆恭傳ト稱シ箕嶺ト號ス幼ニシテ讀書ヲ好ミ天資英拔  
 號記人ヲ驚ス初メ江戸ニ遊學シ後テ業ヲ北筑龜弁南冥ニ  
 受ク又タ京ニ遊フ三四年日夜刻苦少壯一ノ如シ方今闔藩  
 握柄用事異材賢能ヲ以テ稱スル者多クハ隆恭薰陶ヲ受ケ  
 サルモノナシ後テ江戸邸學ヲ司トリ伴讀ヲ兼ヌ大小性ニ  
 班ス留ル五年諸貴顯延テ業ヲ問フ者稍衆シ又府下ノ諸名  
 流ト周旋甚ク勤ム胸腹蓄積スル所多シ其談論往々飄然人  
 ノ意表ニ出ツ毎坐驩然諸人稱シテ以テ今ノ車公トス編著

頗ル多シ其孫子提要已ニ世ニ行ハル其紀伊高野山ニ遊ノ  
詩ニ曰ク

手提鐵杖踏崔嵬、驚破山僧禪定臺、莫怪書生双鬢亂、春風日  
々看花來、

又林園ノ詩ニ曰ク

林中一小壇、是我觀梅處、殘樽夜不收、明月自來去、

梯讓平

梯讓平ハ隆恭ノ二子ニシテ經學詩文ヲ修メ遊學セリ國ニ  
歸リ藩校ノ助教タリ京攝間ニ出テ專ワ周旋ニ從事セリ水  
野正名藩政改革ノ時今井義敬等ト同時ニ寺町德雲寺ニ於  
テ死ヲ賜フ德雲寺ハ讓平居宅ノ隣リナルヲ以一詩ヲ賦シ  
其轉結ニ曰ク

家園咫尺歸不得、一夜寸心万里情、

安元真凱

讓平爲人輕躁ニテ議論ヲ好ミ或ハ罵詈譏諷ニ涉ルノ癖アリ

安元真凱八郎ト稱シ蒼松園又ハ節原ト號ス寛政三年九月  
生ル幼ニシテ穎悟學ヲ好ム慨然父ノ志ヲ繼キ年甫メテ十  
五明善堂素讀方タリ明年賞賜アリ後俸七口ヲ賜フ擢ンテ  
教官タリ遊學業ヲ倉成龍渚ニ受ク文化四年俸三口ヲ加フ  
大良公木之助君臺作君等ノ侍讀タリ十三年竹間ニ進ミ二  
十石三人口ヲ賜フ文政九年大小性格ニ進ミ教授助タリ天  
保元年使番格ニ進ム性剛直嘗テ建白事ヲ論ス其議論時弊  
ニ的中ス其交遊スル所一時ノ名流ナリ六年七月十四日歿  
ス年五十八京限法泉寺ニ葬ル

本莊一謙

本莊一謙一郎ト稱シ孟謁ト字シ星川ト號ス上妻郡山内村



ノ人ナリ考守正清助ト稱ヌ妣太田黒氏天明六年十月二十  
 四日生ル夙ニ文學ヲ好ミ且ツ武事ヲ嗜ム年甫メテ十一高  
 山茂太郎高山長齋ノ子ニ徒ヒ肥後ニ遊フ留學百餘日ニシテ歸ル  
 郷人驚異ス長スルニ及ヒ益勤學ス文化元年年十九京師ニ  
 遊ヒ其明年豊前豊後肥後ニ遊ヒ六年江戸ニ遊ヒ古賀精里  
 ノ門ニ入ル父ノ病アルヲ以歸省ス八年古賀精里韓使ニ接  
 スルヲ以テ鎮西ニ來リ一謙ノ再遊ヲ促ス是ニ於テ遂ニ精  
 里ニ從ヒ東行ス留學四年昇平覺書生寮ノ社長タリ幕府月  
 俸三口金若干ヲ賜フ後々郷ニ歸ルニ及ンテ名聲四方ニ聞  
 エ來リ學フ者多シ乃々別ニ家塾ヲ創ム川崎樂ト稱ス十三  
 年官之ヲ褒シテ浪人籍ニ署ス文政五年特ニ命シテ右筆格  
 ニ擢ンテ俸十口ヲ賜フ講官ニ充ツ實ニ年三十七而シテ家

事ハ則々之ヲ勇平三郎ノ二弟ニ季子自ラ教育ヲ以テ事ト  
 ス九年年ニ銀三百目ヲ賜フ江戸ニ祇役スル數回天保六年  
 竹間組並ニ遷リ八年助教ニ進ミ十四年奥詰タリ歳ニ銀五  
 枚ヲ賜フ宅ヲ府下京隈ニ賜フ弘化二年竹間組格ニ陞リ安  
 政二年大小性格ニ進ム五年二月十五日歿ス年七十三上妻  
 郡大籠山ニ葬ル會葬スル者八百餘人一謙性剛直人ノ不善  
 ナ見レハ則々之ヲ面責ス交ヲ擇フ甚タ嚴ナリ義源公ノ世  
 子タル一謙侍讀ニ任ス輔導甚タ勤ム嘗テ林述齋ニ謀リ輔  
 導規範五卷ヲ著ス義源公ノ徳ノ美名聲天下ニ籍ク者一謙  
 薰陶ノ力居多ナリ爲人寡欲平居服食儉素身ヲ奉スル力メ  
 テ浮費ヲ省キ好シテ厚ク施ス尤モ喪祭ヲ慎ミ謂フ終リテ  
 慎シミ遠ヲ追フ此レ孝子仁人ノ尤モ誠敬ヲ盡ス可キ所ナ

リ是ヲ以テ家ニ神主ヲ奉スル朱子家禮ニ本ツキ邦俗ニ斟酌シテ其誠敬ヲ致セリ母ニ事フル至孝年耳順ヲ過キ愛慕孺子ノ如シ母ハ十九年ノ壽ヲ保ツ者天授ト雖モ亦孝養ノ致ス所ナリ一謙深ク程朱學ヲ尊信ス是ヨリ先キ吾藩學雜駁學制統紀ナレ一謙助教ノ職ニ在ル二十餘年一藩ノ學風純正ニ歸スル者ハ一謙ノ力ナリ一謙傍ラ經濟ノ道ニ志シ殖産ノ業ヲ起シ其江戸ニ在ル佐藤玄海ト交リ六部耕種法ヲ傳ヘテ郷土ニ試ム稗益スル所多シ家計ヲ立ツルニ所有ノ田畑ヨリ生スル米麥ヲ以テ糧食トス茶楮ヲ以テ常費ニ充テ臨時ノ費途ハ山林ニテ辨シ冠婚喪祭ノ規程ニ至ルマテ家法嚴肅ナリ一謙教官ニ在ル三十餘年一日ノ如シ其ノ未タ居テ遷サレヤ四里ノ遠キ早發夜行風雨寒暑未タ嘗

テ一言モ勞ヲ稱セズ一謙居テ府下ニ移スニ及ンテ門人牛嶋益三ヲシテ家塾ヲ司ラシム上妻ノ學アルヤ尙シ享保年間合原窓南馬場村ニ老シ高山長齋津江村ニ起リ闔鄉翕然學ニ志セリ嘗テ高山仲繩唐崎赤水等ノ吾カ筑ニ遊フヤ必ス留リテ上妻ニ在リ仲繩歎シテ曰ク筑後ノ文武上妻ニ在リト長齋ノ子茂太郎舍ヲ長齋ノ宅趾ニ建テ繼志堂ト稱シ遺教ヲ奉ス茂太郎歿シ之ヲ再興スルモノナレ一謙深ク慨シ再ヒ堂宇ヲ其傍ラニ築キ繼志堂トシ益三ヲシテ堂主タラシム一謙ノ心ヲ教育ニ盡ス所以ノモノ如此シ其子ニハ仲太榮三郎等家學ヲ繼キ門人ニハ牛嶋益三高橋素平等輩出セリ

山本戡忠太郎ト稱シ幽篁ト號ス學館備員タリ其爲人眞率

幕モ其外ヲ飾ラス人ト交ル畛域ヲ設ケス其讀書警敏一過  
必ス肯綮ヲ得其詩文ヲ作ル清絶及フベカラサルモノアリ  
家極テ貧朝タ夕ベテ計ラス而シテ恬然以テ累トセス又酒  
ヲ嗜ミ胸次洒落其行事儘瓊瑤アリ然レモ其本性ニ非ス所  
謂佯狂スル者歟常ニ言フ吾輩卑賤豈能ク人ノ上タラシヤ  
日ニ市井間ヲ逍遙シ販夫販婦ト膝ヲ交ヘ談笑ス屋破レ墻  
倒ルモ意トセス或時雨中友人來リ訪フ雨漏ルヲ以テ屋  
中傘ヲ掩ヒ席ニ着カシム又或時官ノ譴責ニ逢フ然ルニ門  
戸ノ設ケナシ俄カニ門戸ヲ建設シテ之ヲ鎖ス後譴責解ク  
ルニ及ンテ猶門戸ヲ鎖シテ開カス人怪ンテ之ヲ問ヘハ曰  
ク我門戸ヲ鎖ス爲メニ設ク是ヲ以テ開カスト其放達拘ラ  
サルヲ見ルヘシ其庄島ノ詩ニ曰ク

庄嶋多徒士。最多五六郎。雖然中小性。十三雜茅亭。竹間御  
右筆。僅々如晨星。何況大小性。恰同待河清。足輕足輕町。古  
町亦足輕。倍臣數輩佳。多住大夫莊。且我論人物。請君傾耳  
聽。整郎稱學者。講釋明善堂。辻倉詩自得。罔非亦研精。戶熊  
學老杜。篇什及日鄉。加幾少年秀。不情見其成。仁卿心甚大。  
詐偽欺蘇張。然其於學問。諸儒不可爭。彦市近視耳。足跡遍  
蜻蜒。吾讀其遊記。要下一二評。其弟池種美。負笈遊武城。才  
美優彦也。行有好文章。峯意得過實。自以此扁倉。病人往々  
起。乃是白驢王。山又橫長劍。市朝日橫行。安刺目偏大。儀增  
足尤長。保々信佛法。每詣談議場。淺郎過諸塗。諸後有餘聲。  
塚助事貨殖。黃金列萬贏。十五或十六。息大苦貧生。豐田昆  
季盤。與誦遭肺刑。久吏痴黠半。西豎樂散征。杉八何顏色。筆  
端難相形。永叔如在世。爲他賦憎蒼。武陵已長矣。變童今也  
亡。澤姓御目附。吹氏盜賊方。人謂勝其任。孰識學弟兄。鹿太  
良有司。梯公實鏘々。其他無異能。飲啖寐復醒。先生衣短袴。  
薄醉嘯長篋。

山本簡

哉早ク歿ス嗣子ナキヲ以テ山田辰平二男簡ヲ以テ嗣トス  
左次郎ト稱ス君山ト號ス江戸及西京等ニ遊學シ為人廉直  
且恭謙人ニ過ク加之才氣警敏其公私ノ事ヲ處スル周密遺  
陋ナレ往々事ヲ以テ依頼スルモノアレハ則テ之カ爲メニ  
拮据之ヲ處スル已レカ事ノ如レ性又酒ヲ嗜ミ溫和ニレテ  
圭角ナシ婦人女子ト雖モ愛慕セサルハナシ然レモ交接ノ  
際苟モ正ヲ失フモノアレハ忿然容レズ亦タ以テ其介ヲ見  
ルベレ淡泊ニシテ聲利ニ淡ク詩文脫俗父ノ遺風アリ其ノ  
京師ニ在ルヤ但馬ノ人齋藤晴菴ト共ニ紀伊ニ遊ヒ那智ノ  
瀑布ヲ覽觀シ其ノ大和ニ遊ヒ延元陵ニ謁スルノ詩アリ曰  
ク  
苦。百。辛。千。皆。作。空。一。坏。陵。墓。白。雲。中。櫻。花。不。識。延。元。恨。南。北。任。

吹春暮風。

岡永鼎

岡永鼎嘉右衛門ト稱ス字ハ有實松陽南陽蘭州竹堂楓處等  
ノ號アリ行徳元穆ノ二子ニシテ寛政十年生ル岡永氏ヲ繼  
ク長スルニ及ンテ東武ニ遊ヒ佐藤一齋ノ門ニ入り肥後木  
下子勤安藝坂井孤山等ト同門ノ弟子ニテ安井息軒鹽谷宥  
陰等ト親シミ善シ經學文章ニ熟練レ最モ詩ニ巧ナリ兼テ  
書ヲ能クス一齋モ其才學ヲ愛セリ後明善堂ノ講官タリ義  
源公ノ侍讀ニ任ス鼎初メ卓爾又富文ト稱ス嘉右衛門ハ公  
ノ命スル所ナリ公薨シ一藩黨派ノ分裂スルニ及ヒ慨歎ノ  
餘賦セシ詩ニ曰ク

祇。應。戮。力。報。君。親。洛。蜀。黨。分。終。不。振。請。看。無。心。造。物。者。花。紅。柳  
綠。集。成。春。

佐田直温

憂念止マズ妻子ヲ捨テ飄然脱走シ鳥行鵲居西轉東旋流寓  
漂泊ス後上野國勢多郡荒口村阿部耕雲ノ宅ニ客居レ明治  
二年六月十三日病歿ス年七十有二

佐田直温修平ト稱レ竹水ト號ス弱冠樺嶋石梁ニ學ヒ又東  
遊昌平覺ニ入り奥羽ニ遊ヒ蝦夷ヲ極メ松前藩主ニ謁レ蝦  
夷錦熊膽ノ賜アリ頼山陽蝦夷錦ノ詩ヲ賦シ與フ復タ山陰  
山陽北陸ヲ遊歴レ越後親不知ノ嶮ヲ踰ヘレ時ノ詩ニ曰ク  
慈母天涯久別離。又逢北地互寒時。行人且說前途惡。膽落越  
州親不知。

同時國歌ニ云

戰ふる片山かき波今こゆと

親よぬけはきぢたるかりらひ

丹後ノ大江山酒顛童子ノ古蹟ヲ探リレ時ハ岩窟中ニ放屁  
レ去ル其出雲大社ニテ國造氏ニ謁見ノ時詩經ヲ講ス唐土  
ノ詩ハ我カ國ノ歌ニテ既ニ我カ久留米ニテハ御繁昌トテ  
久留米中ノ全市街ニテ山鉾等ヲ引廻ハシ歌舞雜沓ヲ興行  
セレ時ノ歌詞ナルモノアリトテ講義後ニ其歌詞ヲ歌ヒケ  
レハ國造氏簾ヲ揚ケテ笑歡セラレキトソ後明善堂講官タ  
リ江戸赤羽邸ニ寓レ義源公ノ侍讀タリ慶應元年三月二日  
病歿ス享年六十有八容貌魁岸其聲鐘ノ如シ天資豪宕小節  
ニ拘ハラス奇ヲ懷キ氣ヲ負ヒ談論坐ヲ傾ク苟モ告クヘキ  
モノアレハ則テ貴顯紳士ト雖モ斷然之ヲ干レテ直言スレ  
ル能ク容レ善ク遇ス蓋レ其胸中灑然惡ム可キモノアラサ  
ルナリ義源公襲封ノ際籠光優渥公駿馬アリ五戸ト曰フ曾

テ直温チシテ之ニ騎セシム調馬行ノ詩アリ公即位踰年ニ  
レテ薨ス泣然泣テ曰ク吾目涕ナレ今ニレテ衣ノ濡ヲ知ラ  
ス精力過絶博ク經史ニ涉リ又詩ヲ善クシ佳篇世ニ傳フヘ  
キ者頗ル多レ

井上收

井上收彦市ト稱シ鴨脚ト號ス池尻葛覃ノ兄ニシテ世々吉  
田氏ノ家宰ナリ幼ヨリ學ヲ好ミ夙ニ經史ヲ涉獵ス槍術拳  
法モ亦其秘ヲ極ム東遊昌平覺ニ入り妍精五年佐田竹水ト  
漫遊シ北奥羽ヲ經途ニ蝦夷ヲ極ム其至ル所優待ニ逢ハサ  
ルハナレ松前藩主ヨリ蝦夷錦熊膽等ヲ賜フ後テ紀行ヲ成  
ス適北錄ト曰フ歸途京師ヲ過キ頼山陽ヲ訪ヒ紀行ヲ出シ  
正テ請フ山陽之レヲ稱揚シ細カニ批評ヲ加ヘ跋文ヲ書セ  
リ性酒ヲ嗜ミ醉ヘハ則テ放歌高吟後テ藩政ノ碩學ヲ賞シ

月俸ヲ賜ヒ歲時進見セシム蓋シ破格ナリ爲人寛厚儉ニシ  
テ能ク施ス人ヲ責ムル薄ク巳レテ責ムル厚シ親ニ事ル尤  
孝詩ヲ善クシ傑作多シ晩ニ和歌ヲ詠ス明治五年七月三日  
歿ス年七十有六天保ノ末年外國船長崎港ニ來泊ス當時ノ  
作ナリ

蠢爾夷蠻不足憂、一王千古是神州、陪臣國命時猶震、日本刀  
寒三使頭、

女田鶴代慧敏和歌及ヒ書ヲ善クス

池尻始

池尻始茂左衛門ト稱シ葛覃ト號ス樺嶋石梁ヲ師トシ後江  
戸ニ遊ヒ松崎謙堂ノ門ニ入り留學九年安井息軒塩谷岩陰  
等ト同門タリ天保九年明善堂講官タリ十五年外國船長崎  
ニ入港セン時虜情ヲ探ツントテ密行セルヲ以テ譴責ヲ受

ケタリ然レモ爾後國事ヲ憂ヒ眞木保臣等ト深ク交レリ文  
 久二年上京學習院ニ會議ス明治元年中士ニ班シ教授タリ  
 議事院副議長ヲ兼ヌ十一年十一月十三日病歿ス享年七十  
 有七天資寬裕度量廣豁好シテ善ク不能テ矜ム最モ兄弟ニ  
 友ナリ維新ノ初メ專ラ尊王攘夷ヲ唱フ公卿間ニ周旋ス東  
 奔西走艱嶮ヲ避ケス事定ルノ後天下文明洋風大ニ興リ終  
 リニ臨ミ門弟子ニ謂テ曰ク朝廷外國ト好ヲ結フ勢然ラサ  
 ルヲ得ス然レモ汝等各愛國心ヲ存シテ外侮ヲ忘ル、勿レ  
 ト果レテ然ラシカ死亦遺憾ナレ終ニ一言ノ家事ニ及フコ  
 トナシ長男茂四郎亦勤王ヲ唱ヘ眞木保臣等ト天王山ニテ  
 割腹歿ス二男嶽五郎水戸藩士分黨ノ亂武田耕雲齋ノ黨ニ  
 加リ常陸筑波山ニ戰死ス

池尻茂四郎

池尻嶽五郎

藤後彬

後藤彬半藏ト稱レ松窩ト號ス東武ニ遊ヒ昌平齋ニ入リ專  
 ラ其業ヲ修ム學校ノ講官タリ性酒ヲ嗜ミ上漏リ下濕フ以  
 テ意トセス屋破ルレハ他ニ移轉レ復破ルレハ又移轉ス其  
 移轉ノ數指屈スルニ暇アラズ貧賤ニ戚々タラス富貴ニ汲  
 ヲタラス塵外ニ高蹈セリ自ラ飄風子傳ヲ著レテ曰ク  
 有飄風子者、面瘦手足骨立、飄々乎行如風之蓬累、因自號飄  
 風子、以詩與酒爲樂、無他技、或謂之曰、子之胸中、甚富于山水  
 矣、有邱阜岡陵之重、而複者有嶽之立者、有峯之高者、有嶺之  
 橫者、有嶂巒巖巖之奇態異狀者、其間有瀑之懸者、有池之澄  
 者、有湖之平者、有河之湯々者、有海之洋々者、而有方寸者、主  
 宰之、猶方戶候、飄風子曰、否、我不獲于君、不信于朋友、生無用、  
 死無名、身長九尺、徒食粟而已、是爲飄風子傳、傳之者誰也、曰

飄風子也、

贊曰、飄風子者、世之棄物也、然有一可取焉、無嘗背肩諂笑之氣、故不好入權家名門、若使人有名利之心、則孔孟之罪人也、申是觀之、則爲飄風子者、不亦難乎、

彬ノ人物飄風子ノ如クナレハ則テ自ラ飄風子ニ托レテ以テ其志ヲ述フルモノカ是レ其ノ飄風子傳ヲ記載レテ彬ノ傳トスル所以ナリ

加藤重慎

加藤重慎幾次郎ト稱レ米山ト號ス弱冠ニレテ山本職ニ從ヒ後江戸ニ遊ヒ安積良齋ノ門ニ入り天保十一年明善堂講官タリ後十監察ニ轉レ江戸ニ祇役レ公子ノ侍讀ヲ兼メ明治二年中士ニ班レ教授タリ二十年三月二十日病歿ス享年七十有四經史該博強記群ヲ出ツ讀書超然疑義錯節ヲ神解

シ數語ヲ出セハ則テ一坐頤ヲ解ク又好シテ文章ヲ作り著書從軍日記等將等將小論聽鶯舍文集等アリ爲人峻峭質直廉隅犯スヘカラス人ノ不善ヲ見レハ假借スルコト能ハス必ス面折シテ之ヲ責ム然レモ好シテ後進ヲ誘服獎勵涵養以テ其ノ材ヲ達ス故ニ人皆愛シテ之レヲ憚ル性又羸虛善ク病ム毎ニ心ヲ攝養ニ用フ飲食節アリ晚飯後必ス散策運動或ハ遠或ハ近唯意ノ適スル所ナリ故ニ羸虛ノ質ヲ以テ古稀ノ壽ヲ保ツ攝養ノ效見ルヘシ廢刀ノ令出ツルニ及シテ鐵杖ヲ腰ニ横ニシ老死ニ至ルマテ脱セス其猶介ヲ見ルヘシ重慎モ一藩分黨ヲ憂ヒ左ノ詩ヲ賦セリ

百花非一色、紅白各成春、捨紅唯取白、是不愛花人、

姪加藤常吉モ亦文才アリ最モ書ヲ善クス眞木保臣等ニ從

加藤常吉



遊レ勤王ノ志ヲ抱ケリ元治元年保臣ニ從ヒ天王山ニテ割腹ス

矢野一貞幸太夫ト稱ス文政十年馬廻組タリ祿二百石ヲ食ム國學及和歌ヲ善クス文久三年與頭格ニ進ミ慶應元年先手物頭格ニ進ム維新ノ後ニ至リ北野神社ノ祠官タリ一貞天資精神氣魄人ニ過絶ス領内ノ故跡古戰場古墳及ヒ斷碑缺瓦土中ノ古器物等ニ至ルマテ精究搜索古史ニ徵セサルハナキナリ著書將士軍談漢學通考等若干卷アリ  
重富鼎字ハ文卿繩山ト號ス生葉郡樋口村ノ人ナリ弱冠ニレテ日田廣瀨淡窓ノ門ニ入ル努力多年後江戸ニ遊ヒ佐藤一齋ノ門ニ入り水戸ニ遊ヒ會澤正志ヲ訪フ後對鷗公召シテ學館ノ講官トス明治七年十二月十七日歿ス壽六十有九

宮崎信敦

鼎容貌端嚴ニシテ人ニ接スル溫和好シテ忠臣義僕ヲ談ス聞ク者感動ス著書和漢事類蒙求等若干卷アリ  
宮崎信敦ハ三瀨郡蛭池村ノ人ナリ父信章五世ノ祖中原信尹肥後國山鹿郡鍋田村ヨリ來リ宮崎氏ヲ再興ス宮崎氏世々郷社三嶋神社ノ祠官タリ曾テ亂ヲ避ケテ柳川山中ニ匿レ其家殆ント廢セントス因テ信尹來リテ其家名ヲ襲ト云信尹ノ先世ハ菊池氏ノ旗下ニ屬シ山鹿城ヲ守レリ天文中原兵部太輔某采邑鍋田村ニテ薩兵ト戦フ格闘レテ岩野川ノ深淵ニ陥リ水底ニアルヲ稍久兵部大輔頗ル水練ニ達ス故ニ水中敵首ヲ獲テ上陸ス薩兵四圍攻撃大輔遂ニ戰歿ス今中原氏ノ先塋ニ九尺餘ノ大石碑ヲ存ス銘アリ淨泉禪門ト刻セリ天文以來采地モ押領セラレケレヒ細川氏ノ時

名族ノ遺孽ヲ以テ郷士トス所謂一疋今ハ事故アリテ高木ヲ氏トス信敦文化中京師ニ遊フ吉田三位其篤志ヲ嘉ミシ其隱室ニ居ラシム勤學ノ餘暇歌詠ヲ香川景樹ニ學フ景樹屢々其非常ノオアルヲ賞ス其高足弟子ト懇親シ其名都下ニ聞エ吉田三位執奏シテ叙爵セシメントス信敦固辭ス如何トナレハ藩政ノ時五位ニ叙スル家ハ兩社家鏡山宗崎宮司船曳河口及ヒ酒見隈等アルノミニテ其他ノ社家ニ其例ヲ見サレハナリ然ルニ三位云辭スルコト勿レ予思フ所アリトテ推任ノ事ヲ藩老ニ照會アリ文化十四年五月二十二日從五位下ニ叙シ二十三日阿波守ニ任ス直ニ入朝皇恩ヲ拜謝ス歸郷ノ後藩ノ優待ヲ受ケタリ郷村ノ社司ニテ叙爵セルハ信敦ヲ以テ嚆矢トス是ヨリ學事ヲ以テ叙爵ノ道開ケリ

於是國老有馬照長有馬恭賢吉田圖書ヲ始メ歌詠ノ教ヲ乞フ藩校教授樺嶋公禮同シク教ヲ乞フ學館ニテ毎月講義アリ是ヨリ久留米ノ歌詠一時ニ振起セリ然ルニ儒者ノ徒竊カニ忌ンテ教授ヲ嘲ルニ至レリ是ニ於テ信敦斷然出校ヲ謝絶セリ隣藩佐賀教授草場佩川モ亦添削ヲ乞フ四方ノ門人來遊セル者年ヲ逐フテ夥多ナリ近藤芳樹鈴木重胤ノ如キ海内ノ有名名家モ來訪シテ耆老不倦ヲ賞賛ス安政中藩ヨリ白銀若干ヲ賜ヒ之ヲ賞ス文久年中歿ス八十有六信敦幼ニシテ常人ニ異ナリ一日熊野村熊野神社祭祀アリ家僕信敦ヲ脊負テ參拜ス群衆中脊ヲ下リテ物ヲ見ル忽チ家僕ヲ失フ彷徨路傍ニ在リ一老翁之ヲ憐ミテ其居所ヲ問フ答テ云見ハ日本ノ者ナリト時ニ家僕漸ク尋テ來ル老翁嘆シテ

云此兒眞ニ大器ナリ後必ス名ヲ成スアラント信敦ノ詠歌  
中ニテ景樹ノ最モ賞譽セシハ

四十ニ成ける年の曉咏る

我昔おらていぬぬし曉詠

覺ゆる身といつ成りよるん

船曳大滋

船曳大滋齋宮ト稱ス岡永鼎ニ從學スルヲ數年年十七ニシテ長崎ニ遊ヒ中嶋廣足ノ門ニ入り後江戸ニ遊ヒ橘守部ノ門ニ入レリ守部大滋ノオアルヲ愛シ吾カ學統ヲ繼承スヘキモノハ此ノ人ニ非スハ他ニ求ムヘカラサルヲ以テ繼嗣ヲ肯セハ娶ハスニ其ノ女ヲ以テセントス眞木保臣ノ東遊ニ際シ守部ヨリ頻リニ保臣ノ媒介ヲ依頼セリ保臣モ大滋ハ船曳家ノ長男ナルヲ以テ如何アラント答フルヲ以テ守

部ハ直接ニ大滋ニ談セシモ大滋ハ肯セスレテ辭謝セリ其京師ニ遊ヒ香川景樹ヲ訪ヒシニ景樹モ亦其才ヲ愛シ君ノ才ヲ以テ余カ家ニ一年留ラハ其志ヲ遂ケシムヘシ君若シ今ヲ捨テ再遊ヲ期スルアラハ余ハ鬼録ノ人タルヘント景樹ヨリ大滋ニ贈リシ和歌ニ曰ク

大滋ぬしそめて我社ニ遊ひてよこり江了生出る蘆詠  
とひとのし思ひ過よし事此悔しそととみ給ふ汝聞と抱  
こひておほきぬくも猶曰

肥後守景樹

願えくハ唯假抱めよ思ふれよ

豊蘆原乃一本抱是れ

後テ再ヒ長崎ニ遊フニ及ヒテ廣足ヨリモ亦其學統ヲ繼承

久留米小史卷之二十一  
セシコヲ高足弟子ト相謀リ既ニ書籍類ハ悉ク讓與ス外ニ  
家産ヲ立ツルニハ倉庫數基ヲ以テセリ且ツ大滋繪畫ヲ善  
シ四方ノ求メ多キヲ以テ大ニ學事ヲ妨ク是ヲ以テ後筆ヲ  
執ラス崎人甚々之ヲ惜ム然ルニ大滋脚氣病ニ罹リ嘉永元  
年十月長崎ニ於テ歿ス年二十九モシ大滋ヲシテ天之レニ  
年ヲ貸シ其才ヲ舒ヘシメハ一時天下ノ歌仙文人ソノ右ニ  
出ルモノアラシヤ惜哉

久留米小史卷之二十終

船曳鐵門校正

戸田 幹編纂

久留米小史卷之二十一

第四

武技

武技ノ射術ハ瓊林公ノ時西澤左近右衛門西澤彌右衛門伴  
彌五右衛門伴六郎左衛門杉六右衛門等トス慈源公ノ時伴  
六左衛門杉六右衛門等門人ノ射術上覽アリ又山村孫兵衛  
堂前ヲ御原郡西原野ニテ試ム大乘公ノ時ニ至リ宮部三左  
衛門ノ妙手輩出セリ對鷗公ノ時山村麻之丞松岡友記等ア  
リ馬術ハ瓊林公ノ時中村齋宮アリ靈源公ノ時城十郎左衛  
門ヲ聘セリ其後十郎左衛門ノ孫大八ハ最モ妙手ノ名ヲ得

其名遠邇ニ傳フ大八ノ後六郎九十九等アリ劔術ハ梅巖公ノ時眞里谷圓四郎ヲ聘ス圓四郎ハ擊劔ニ練達シ其門人數萬人ニ及フト云フ其後加藤田新八加藤田平八郎神陰流ヲ傳ヘ津田傳津田磯之丞一傳流ヲ傳ヘ今并靜左衛門直神隱ヲ傳フ鎗術ハ梅巖公ノ時井上久豐ヲ聘シ久豐ノ孫照算武名遠邇ニ轟キ自得流ヲ傳フ其養子照續亦妙ヲ得タリ寶藏院ニテハ深井得兵衛弟半藏名ヲ施セリ拳法ハ澁川胤親犬上郡兵衛等ノ妙手アリ其後澁川伴五郎石野郡藏等ノ強勇ヲ出セリ又赤松十郎左衛門森八郎右衛門下坂與三太夫等輩出セリ砲術ハ入江平馬濱田郷右衛門永野機藏等ヲ聘セリ大慈公ノ時平山正常ヲ聘シ正常ノ子武薰及ヒ永野機藏濱田郷右衛門入江平馬鳥居注連右衛門等アリ火技ヲ西洋

宮部三左衛門

流ニ變セシハ淡河次郎右衛門等トス宮部三左衛門寛政六年日置流竹林派ノ射術ヲ以テ士籍ニ列シ其術ニ妙ヲ得テ一時其名ヲ轟セリ其一ニ二ヲ舉レハ一日三左衛門筑前福岡ニ在リレ時偶射術ノ師家ニテ稽古アルヲ商人ノ裝ニテ見物セリ又明日モ同所ニ至ル昨日ノ如シ門人等之ヲ尤テ曰ク汝ハ何者ソ日々來リ我等ノ射術ヲ見ル汝若シ射術ノ熱心アラハ試ミニ之ヲ放ツヘシ三左衛門恐懼退縮シテ曰ク不肖射術ノ熱心ヲ以テ竊カニ諸公ノ名技ヲ窺ノ諸公若シ不肖ノ拙技ヲ許レ一矢ヲ放タレシハ幸甚カラシ門人三左衛門ヲ場内ニ入ラレム弓ヲ引箭ヲ放ツ箭中ラス家角ノ窓ヨリ檐外ニ飛フ門人一同失笑ス又一箭ヲ放ツ又檐外ニ飛フ又一箭ヲ放ツモ前ノ如シ門人一同

不興ニテ速カニ退カシム三左衛門長縮レテ去レリ後門人等其箭ノ檐外ニ飛フ者ヲ檢セシニ三箭共ニ檐外ニ南瓜ノ掛レル者ヲ貫キタリ門人等之ヲ見大ニ驚キ曩ノ商人ハ尋常ノ商人ニハアラスト師ニ請ヒ福博市中ヲ物色セシニ其商人ノ宮部三左衛門ナルヲ以テ乃テ更ニ三左衛門ヲ迎ヘ大ニ饗應セリ此ヲ以テ其名福博間ニ轟キタリ又京師蓮華王院三十三間堂ニテ新熊野觀音寺別當射術ヲ好ミ八坂ノ青塚ノ的場ヘ行キレ歸リニ當寺ノ堂後ニ休ミ射始メシヲ以テ通シ矢ノ濫觴トシ夫ヨリ連年諸藩臣來テ射術ノ名譽ヲ競フ當寺ヨリ通り矢ノ檢証出テ其一ヲ蒙ル者ニハ金銀ノ慶ヲ渡シ尾藩ヨリハ星野勘左衛門八千箭ヲ通シ貞享三年四月廿七日紀藩和佐臺八郎一万三千五十三通り矢八百

山村彦兵衛

吉田熊土  
松岡友記  
野田園次  
園田祥右衛門

城隆元

三十三數ニシテ一ヲ得タリ我藩ヨリ三左衛門通り箭ヲ致シ高點ニテ檢證ヲ得タリ今猶通シ箭ノ額堂中ニ掲ケアリト云其他粉挽白ヲ的ニシ其穴ヲ穿ツ等其妙技口碑ニ傳フル者鮮ナカラス山村彦兵衛日置流道雪派ヲ以テ享保年間迄仕レ其子孫麻之丞等ニ至リ頗ル練磨セリ日置流竹林派ヲ以テ吉田熊土松岡友記等モ師範家タリ其野田園次道雪派ヲ以テ園田祥右衛門等亦皆射術ノ師範タリ城隆元大八ト稱ス馬術ノ妙ヲ得タリ祖父十郎左衛門宗信靈源公ノ時大坪流ヲ以テ我藩ニ迄仕ス後人見流ト改ム祿百五十石ヲ食ム大八益其妙技ヲ極ムルニ及シテ祿百石ヲ加ヘ貳百五十石ヲ食ム其術ノ妙ナル人口ニ噂炙スルモノ多シ其最モ著名ナルモノハ幕府ニ名馬アリ然レモ蹠喫奔

逸當時馬術師之ヲ馴馭スルコト能ハス久留米ノ城大八ノ名府下ニ聞ユルヲ以テ幕府大八ヲレテ試ミニ右ノ名馬ニ乗ラシム大八馬埒ニ出テ馬ニ跨ルニ及ンテ直ニ馬丁ヲ去ラシム衆人之ヲ危ム大八從容トシテ花形ヨリ式ノ如ク數回馬埒ヲ往復シ尋常ノ馬ニ異ナラス衆人舌ヲ卷キ歎賞セザルハナレ是ヲ以テ大八ノ名益轟ク而レテ我藩邸ニテハ幕府ヨリ大八ヲ登庸ノ舉アラシメテ擢レ速カニ大八ニ歸米ヲ命シ再ヒ東役セシメスト云文化四年卒ス年七十子隆經六郎ト稱シ孫隆光九十九ト稱ス皆妙術ヲ傳フ其他門人千五百人アリ其俊秀ナル者板垣軍太下村市右衛門入江平馬坂本元藏馬場織八平塚莊兵衛速水重人今井三也村尾基等亦皆妙術ヲ傳エタリ

城隆經

城隆光

眞里谷義旭

眞里谷義旭圓四郎ト稱シ初メノ名ハ山名勝之助上總國眞里谷村ノ人ニレテ武田三河守清嗣ノ後ナリ幼ヨリ擊劔ヲ學ヒ一雲ノ門ニ遊ヒ朝夕孜々トシテ修練ス一旦豁然トシテ大悟ス時ニ年二十五ナリ此ニ於テ一雲直面目ニテ傳授シ且ツ賞シテ曰ク先師上泉名譽ヲ天下ニ施スモノハ三十餘歳ノ時ナリ一雲モ亦大猷公ノ台聽ニ達シ名譽ヲ四海ニ顯スモ四十餘歳ノ時ナリ今汝二十五歳ニレテ師ト尊稱セラル、古今ノ稀ナル所ナリ又岡本水哉居士義旭ヲ賞シテ無窮軒ト號ス一雲モ亦賞シテ無爲軒ト號ス其圓四郎ト稱スル所以ノ者ハ蓋シ視之以目方也。以心則圓。聽之以耳方也。以心則圓。言之以口方也。以心則圓。動之以形方也。以心則圓也。視聽言動之四者。得其圓滿。則可謂心之妙用矣。汝夫思焉。門

加藤田新八

生甚々多シ列藩諸士其門ニ入ラサルモノナシ其數万人ニ及フト云我藩ニ旌仕シ寛保二年二月四日歿ス年八十有二心流院一法不存居士ト謚ス東武三田町南臺寺ニ葬ル其後我藩ニテ神隱流一傳流直神隱流等ノ諸派蔓延セシモノハ皆圓四郎ノ薰陶餘流ニ出テサルハナシ神隱流ニテ加藤田新八率先シテ他流試合ヲ創始シ加藤田平八郎山脇又次郎園田圓齋中山倉次郎武藤爲吉松崎浪四郎等ノ名技輩出セリ其後一傳流直神隱流等ニモ他流試合ヲ創始スルニ及シテ一傳流ニテハ津田傳津田磯之丞弟津田岩雄竹井安太夫直神隱流ニテハ今井靜左衛門林種次郎等ノ名技輩出セリ受洲隱流ニテ黒岩金右衛門昭心流棒術眞三貫流ノ棒術ヲ以テ亦皆師範セリ

津田傳

今井靜左衛門

黒岩金右衛門

井上照算

井上照算彌左衛門ト稱ス五世祖照一和泉塚ノ人ナリ鎗術ヲ杉本氏ニ學フ其蘊奧ヲ極ム反覆研究大ニ自得スル所アリ乃々其術ヲ弟子ニ傳フ妙見自得流ト稱ス筑前黒田氏ノ聘ニ應ス其甥久豐最モ其術ニ長ス寶永七年梅巖公ノ時我藩ニ旌仕ス三世祖滿能ク箕裘ノ業ヲ繼キ鎗術感問ヲ著ス祿百二十石ヲ食ム傳ヘテ照算ニ至ル照算爲人魁梧雄偉沉毅豁達武名夙ニ聞ユ文政八年俸米三口ヲ賜フ時二年二十五天保八年馬廻組ニ列シ俸米七口ヲ賜フ十年家ヲ嗣ク弘化三年祿五十石ヲ加賜ス安政五年側物頭タリ武名益著レ天下其名ヲ知ラサル者ナシ會津藩志賀小太郎ト云者鎗技ヲ以テ名ヲ天下ニ著ス海内ヲ修業シ我藩ニ來リ照算ト優劣ヲ競フ小太郎其力ノ及ハサルヲ知リ後再遊セリト云照



算弟子薰陶獎勵スル山ヲ踰エ海ヲ渡リ遠江屬集レ英傑俊  
髦其門ニ出ル者多レ貫首ノ弟子堀江五左衛門荒卷權兵衛  
佐藤仁右衛門波瀨要次郎等四天王ノ稱アリ然リ而シテ照  
算名既ニ高ク海内ニ轟ク日本第一ト稱スル者蓋シ溢美ニ  
アラサルナリ維新以來士常職ヲ解キ軍ハ銃隊ヲ以テ編成  
シ兵制一變ス而シテ弓鎗廢ス然レモ照算以テ意トセス性  
益裁ヲ愛レ自得ノ境ニ優遊レ無爲ノ域ニ出入レ能ク自ラ  
樂シム者廢ト不廢トノ外ニ在ルカ如シ其猶介ヲ想見スヘ  
シ子ナシ富安守富ノ男照續ヲ養ヒ嗣トス順藏ト稱ス照續  
モ亦鎗技ニ練達シ家聲ヲ墜サス先ナテ歿ス照算明治十四  
年五月十五日歿ス年七十一芋扱川町無量寺ニ葬ル  
森尙友八郎右衛門ト稱ス正徳年間高田寶藏院流ヲ以テ我

井上照續

森尙友

深井得兵衛

古川小平太

澁川胤親

藩ニ旌仕ス深井得兵衛弟半藏磯野寶藏院流ヲ以テ技術ニ  
練達シ其子學之進時ニ至リ喜多村彌六佐藤市助松下岩次  
郎等名技輩出セリ古川小平太モ亦同流ヲ以テ進シ其子平  
馬等ニ至リ技術益練達セリ  
澁川胤親拳法ヲ以聘セラル胤親享保年間關口流柔術ヲ以  
テ稽古規則ヲ艸定セリ

夫欲報國盡忠者。固士之常情。而其所以報盡者。則在乎立  
誠焉。所謂誠也者何。士之所以爲士之實也。中庸之誠者。天  
之道也。乃柔術之所以設也。易曰。立地之道。曰柔與剛。又曰  
坤元資生。乃順承天。蓋心譬則天也。形譬則地也。而形能柔  
順則成物。弱強則必敗。故由勢法學之。時溫習之。反求於己。  
而閑其邪。學々不已。盡思積德。使弱強之形。變化以柔順焉。  
則進退動止。隨意承事。至以成物。是爲柔術之妙。是爲柔術  
之德。善如是而加之以讀書講理之功。則皆開才長。道明德

立。靜則可以術國。動則可以撥亂。而後可以盡士之所以爲士之實矣。孟子之居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志。獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。小人從之。則保全其身。大人用之。則齊治家國。豈不報國盡忠之至乎。是爲稽古規云。

- 一 不論貴賤少長。宜以先覺爲等威。
- 一 勿錯班次。辨肄業。而專行私事。
- 一 勿廢法律。犯訓戒。而猥競雌雄。
- 一 血氣盛衰。兼小吞弱之徒。不許就席。
- 一 固禁耳語雜談。失容。及論時政得失。
- 一 忠信以學。遜讓以習。舍己從人。廣攬衆益。
- 一 須資朋友之善。而知自己之過。
- 一 一途則達。多岐則迷。當務專心致志。

許昌新裁之云。士之品。大概有三。志於道德者。功名不足以累其心。志於富貴而已者。亦無所不至矣。志於富貴。即孔子所謂鄙夫也。所志不可不

謹擇焉。

時享保七年壬寅二月朔日

澁川胤親識

赤松十郎左門

森八郎右衛門

下坂與三太夫

犬上永保

澁川氏ハ數代江戸赤羽藩邸ニ在リ其技ヲ研磨シ藩地ニテハ赤松十郎左衛門新々關口流ヲ傳ヘ佐田門兵衛佐田莊藏等其傳ヲ受ケ長澤小四郎ニ傳ヘ淺田忠次郎ハ佐田門兵衛ノ門人ヲ以テ別ニ一派ヲ立テタリ森八郎右衛門良移心流ヲ以テ正德年中我藩ニ旌仕シ其傳ヲ下坂與三太夫ニ授ケ其子專右衛門門人野田六郎宇高權太夫等最モ練達セリ犬上永保郡兵衛ト稱ス近江犬上郡彦根ノ人ナリ父ハ伊藤宗壽母ハ廣田氏永保幼ニシテ母ヲ失ヒ父宗壽永保ヲシテ出家セシメントシテ近村ノ寺院ニ遣ハセシニ永保ハ逃レ歸リ專ラ犬上氏ノ家名ヲ立ントラルノ志アリ年十九ニシテ京都ニ出ツ伯父棚橋五兵衛一卷ヲ授ケテ曰ク是レハ汝

平山武藏

淡河次郎左衛門

石野郡藏

石野八十左衛門

カ先祖犬上左近時監永勝ヨリ傳來ノ扱心流組打柔術ノ書  
 ナリ今汝上京スルアラハ此書ノ趣旨ニ合セシ流法ヲ求メ  
 テ修業スヘント永保コレヨリ一心ニ其法ヲ研磨ス年二十  
 九ニシテ初メテ江戸ニ出テ處々ニ寄寓シ道場ヲ設ケ師範  
 ナ施セリ寶曆二年本藩ニ旌仕シ竹間組ニ班シ月俸二十五  
 口ヲ食ム時ニ年四十七ナリ江戸赤羽藩邸ニ在リ扱心流ヲ  
 以テ專ラ子弟ヲ教育セリ其徒弟ニハ石野八十左衛門及ヒ  
 郡藏等ノ強勇ヲ出セリ藩地ニテハ  
 淡河次郎左衛門扱心流ヲ以テ渡邊七太夫等其高弟タリ其  
 他古賀仁右衛門石田良右衛門藤戸鐵次郎等亦扱心流ヲ以  
 テ師範タリ  
 平山武藏源太夫ト稱ス若松流砲術ノ師也父正常延享中初

テ我藩ニ旌仕ス祖父正森ハ筑前ノ人ナリ業ヲ若松生重ニ  
 受ク生重ハ原田清安上野重之ノ二人ニ受ク上野ハ火箭ヲ  
 能クシテ抱放スルコト能ハス原田ハ抱放ヲ能クシテ火箭  
 スル能ハス生重ハ二家ノ長ヲ兼テタリ祖父正森其業ヲ受  
 ク因テ若松流ト稱ス享保年間筑前若松海ニ南京船ノ漂泊  
 スル官兵ヲ發シ之ヲ伐タシム正森火技ヲ用ヒ蠻船ヲ燒キ  
 擧テ之ヲ殲ス官其功ヲ賞ス武藏爲人剛毅方正旣ニ別家シ  
 テ浴務ニ從事ス宗家嗣子幼ナルヲ以テ入テ其跡ヲ繼キ專  
 ラ火技ヲ研磨ス玉打ノ如キハ諸家發明多シト雖モ棒火箭  
 ニ技術ヲ施シ五段發ヲ發明スルニ至リテハ若松流一家ノ  
 ミナリ然シテ傍ラ文事ヲ好ミ樺島石梁等ト最モ親善ナリ  
 其他誹諧等モ秀逸ニシテ浪華ニテ抄集セシ若葉集肖像ノ

上ニ記載セシ

皐月雨や瀬をくゞり鉢の魚

終身妻ヲ娶ラス以テ其狷介ヲ想見スヘシ其子助正孫正英  
及ヒ門人太田仁兵衛綾野紋太夫淺田門次久保喜太夫等ノ  
名技輩出セリ

入江平馬  
淺田郷右衛門

長野機藏  
鳥居注連右門

入江平馬ハ荻野流ニテ烽火ノ妙ヲ得磯流濱田郷右衛門小  
銃ノ技自綠流長野機藏門人鏡山直次等玉打鳥居流鳥居注  
連右衛門ノ砲術等ノ名技輩出セリ其他若松流ニテ海田德  
兵衛大極流ニテ緒方團藏種ヶ嶋流ニテ青木半次等亦皆師  
範タリ

淡河正範

淡河正範次郎左衛門ト稱ス祿百七十石ヲ食ム側物頭ヨリ  
徒士頭中小牲頭ヲ經浪人奉行タリ祿五十石ヲ加賜ス其西

洋砲術ヲ長崎高嶋四郎太夫ニ學ヒ其妙技ニ通ス其後江戸  
ニ在リ吉見七次郎吉村多門等ト下曾根金三郎江川太郎左  
衛門等ニ學ヒ益其技ヲ極ム軍制方ヲ兼テ騎射拳法ニ通ス  
文久三年豊前大里ノ砲臺ヲ築ク其製極メテ牢固ナリ後對  
鷗公千歲流ヲ開設シ一藩ノ人士ヲシテ悉ク火技ヲ學ハン  
メラル吉村多門長谷川半兵衛ヲシテ師範役トスコレ皆正  
範ノ餘流ヲ繼クモノナリ我藩ノ西洋火技ヲ傳フル者正範  
ヲ以テ嚆矢トス文久四年歿ス年六十八

技 術

技術ノ醫ハ靈源公ノ時眞部仲菴ヲ聘シ祿三百石ヲ賜フ同  
時齋藤玄賀木村元叔久保宗菴等亦名醫ト稱セリ其後百餘  
年間專ラ漢醫法行レ醫ハ仁術ト稱シ藥價ヲ貪ラス謝金ノ

多寡ハ患者ノ意ニ任セリ患者危篤ノ際ニ至リ人參麝香等  
高價ノ藥品ニ至リテハ必ス患者ヲシテ自ラ藥店ニ就キ之  
ヲ購求セシム凡ソ患者ヨリ診察ヲ請ヘハ醫師ハ藥函ヲ携  
帶シ來リ草根木皮ヲ調合シ與フルヲ以テ患者ノ家ニテハ  
銅鍋ニ水一合ヲ注キ藥ヲ投シ七分ニ煎シ詰メ啜飲スルヲ  
リ患者危篤ノ家ニテハ醫師ノ診察毎ニ酒肴ヲ饗スルヲ以  
テ常トス此ヲ以テ患者看護ノ勞ヨリモ醫師ニ饗スル酒肴  
ヲ辨スルノ勞ヲ厭フモノアリ其官醫ハ頭髮ヲ禿顯ニシ衣  
ハ外套ヲ着ケ諛媚迎合幫間ノ舉動アリ大慈公ノ時ヨリ安  
元素元田中純夫父子山本周民古賀椿菴松下元丈壽菴等皆  
ヒ役ニ任セリ大良公ノ時宇治田雲嶂川越氏ノ法ヲ傳ヘ久  
留米地方ノ醫風ヲ一變セリ惜哉壯年ニシテ歿ス雲嶂ノ後

ニ起リシモノハ北村文周松下養安外科ニテハ古川甫英等  
トス天保年間工藤謙同豐後ヨリ來リ專ラ蘭醫法ヲ唱フ田  
山甫島寬造官醫ニテ山本順達等亦蘭醫法ヲ唱フ對鷗公安  
政万延ノ際ニ至リ中嶋泰民松下元芳等大坂緒方享菴ノ門  
ニ入り蘭書ヲ學ヒ學理ヲ究ム二氏開業僅カニ數年未タ十  
分ノ技倆ヲ施スニ及ハスシテ歿ス然レモ我カ久留米地方  
ニテ横文字ニ通スル者二氏ヲ以嚆矢トセサルヲ得ス桂永  
壽永保等ノ金銀銅鐵ノ彫刻ニ於ル三谷永伯狩野畫ニ於ル  
梅巖公ノ時城中ノ金堀障ヲ畫カシム其後永錫ニ至リ最モ  
妙手ノ名ヲ施セリ田中傳左衛門平井種八ノ算術ニ於ル松  
岡逸衛ノ書法ニ於ケル野田俊益ノ茶道ニ於ケル吉和道元  
帶屋宇兵衛ノ圍碁將棋ニ於ル松木清之進井上市郎右衛門

等ノ猿樂狂言ニ於ケル山布留秋津嶋小野川等ノ誹諧角力  
ニ於ケル皆一時名ヲ遠邇ニ施セリ劔工ニテハ生葉郡大石  
村ニテ寛正文龜ノ際ニ永著永教光茂實等ノ名工ヲ出シ其  
後永正大永ノ際救國茂實等アリ天文ヨリ元祿マテ資永茂  
勝昌直重親等アリ延寶年間鬼塚義國アリ應永年間清秀ア  
リ梅巖公ノ時清修ト云者アリ越後守ニ任シ菊ヲ切り名劔  
ヲ鍛鍊ス義源公ノ弘化年間新清秀アリ清秀ハ劔工ノ妙ノ  
ミナヲス練鐵ニ妙ヲ得タリ其西京ニ在リ鴨水ヲ以テ鐵笛  
鐵弓等ヲ製セリ田中久重ハ慧敏水機關ニ妙ヲ得後氣船及  
ヒ大砲等ヲ製造シ年七十ヲ過キ東京ニ出テ專ラ製鐵事業  
ニ從事シ其名遠邇ニ傳レリ

眞部臧仲菴ト稱シ伊蒿子ト號ス京師ノ人也醫ヲ岡本玄治

眞部 臧

ニ學ヒ頗ル其妙ニ至ル靈源公ノ時醫ヲ以テ我藩ニ筮仕ス  
祿三百石ヲ食ム此時ニ當リ醫者ニテ藥ニ人參ヲ用ヒシ時  
ハ其價ノ不廉ナルヲ以テ必ス患者ヲシテ自ラ辨セシム臧  
ハ然ラズ人參ト雖モ自ラ藥中ニ加ヘテ其藥價ヲ辨セシメ  
ス一日藥餌ヲ誤リ用フ官ニ告ケ自ラ黜キ京師ニ隱居ス一國說  
若ト議論協ハスレテ去レリトモ云フ專ラ儒ヲ以テ行ハル改メテ藤井懶齋ト稱ス  
復タ刀圭ヲ執ラス超然世累ヲ絶テ其學紫陽ヲ宗トシ高ク  
性理ヲ談ス一時籍然隱君子ノ聲アリ懶齋本ト豪氣老ニ及  
ンテ益慷慨室鳩巢懶齋ニ於テ半面ノ識ナシ而シテ甚タ之  
ヲ推尊ス伊蒿先生徵君ト稱ス其著ス所國朝諫諍錄閑齋筆  
記睡餘錄本朝孝子傳二禮同覽北筑雜稿等數種アリ八十六  
歳ノ元旦ニ詠セシ和歌ニ曰ク

八十あより六田代遊於古柳

およ此春も朽や残らん

臧同時久留米ノ醫ニテ名アリシモノハ齋藤玄賀木村元叔  
久保宗菴等トス

田中 式

田中式純夫ト稱シ貫夫ト字ス幼ニシテ書ヲ讀ミ年未タ壯  
ナラス召シテ醫官トス後ヒ役格ニ進ム三君ニ歷事シ近侍  
數年寵祿漸ク加リ爲人溫敏才氣人ヲ絶ツ志刀圭ニ屑々々  
ラス而シテ學ノ勤ムル理ノ晰ヲカナル技ノ大ニ人ニ信セ  
ラル、闔國蓋シ比スルモノ鮮シ性又孝友施ヲ好ミ戚族ヲ  
親ミ奴婢ヲ恤ミ家政藹如タリ寶曆四年七月廿四日生ル文  
化十三年十二月廿七日實ヲ易フ享年六十三  
宇治田崇雲嶂ト稱シ剛不吐齋ト號ス其先紀州人曾祖東蕃

宇治田雲嶂

醫ヲ業トシ來リテ我藩ニ仕フ祖守助考泰亮世々其職ヲ襲  
キ泰亮田波氏ヲ娶リ雲嶂ヲ生ム雲嶂幼ニシテ父ヲ喪ヒ幾  
ク無クシテ母ヲ喪フ零丁孤苦炊烟殆ント繼カス雲嶂之ニ  
處テ恬然タリ年二十一京師ニ遊ヒ川越山本二翁ノ門ニ入  
リ從學數年業成リテ西歸ス擢テ侍醫タリ大良公特ニ之ヲ  
寵シ東觀毎ニ必ス從フ已ニシテヒ役格ニ進ミ祿百石ヲ賜  
フ體貌羸弱ト雖モ志氣人ニ過絶ス平生惟濟世ヲ以テ已レ  
カ任トス遠近病客日々輻湊ス必ス躬親ヲ之ヲ診察シ殆ン  
ト寢食ニ違フラスレテ毫モ厭倦ノ色ナシ亦門生ヲ受クル  
已レカ子ノ如ク困乏無資ノ者常ニ衣食ヲ給レ之ヲ教ヘ書  
ヲ講シ技ヲ論シ一日モ廢セス四方風ヲ慕ヒ從遊者雲集ス  
聲名藉ク甚シ吾カ藩醫業ノ盛ナル古ヨリアラサル所ナリ

然ルニ自ヲ視ル飲然及ハサルカ如シ初メ雲嶂ノ川越氏ノ門ニ入ルヤ古ヨリ傷寒論ハ一小冊ニテ漢ノ張仲景ノ著ナレモ三陽三陰虛實寒熱方法規則容易ニ辨解シ難ク和漢共ニ其奥旨ヲ看破スルノ人ナレ川越氏ニ至リ初メテ傷寒藥品體用論ヲ著ハン分明ニ辨別シ治療上現ニ實驗アリ門生雲集ス雲嶂ハ塾長ニテ大ニ師傳ヲ得且ツ自得スルモノアリ西歸後開業スルニ至リ技倆活潑効驗意表ニ出テ久留米ノ醫風ヲ一變スルニ至レリ藥石ヲ鑑別シ經方ヲ沈研シ本朝漢土ノ載籍ヨリ西洋ノ書ニ至ルマテ醫道ニ關係スル者討究セサルハナレ又經史ヲ涉獵シ好シテ古今成敗ヲ談シ議論往々人ノ意表ニ出ツ著書若干未タ稿ヲ脱スルニ至ラズ疾革ナルニ及ヒ豫レメ死期ヲ知り門生及ヒ故人ヲ召レ

託スルニ後事ヲ以テレ且ツ之レニ語リテ曰ク吾世ニ於テ遺憾ナレ惟恨ム編著未タ成ラズ後ニ傳フルナキノミ此ニ由リ之レヲ觀シハ其ノ期スル所ノ者ハ千秋ノ業ニシテ名ヲ一時ニ馳スルハ其志ニ非サリシナリ天輕シク人ニ與ヘサル者ハ才ナリ既ニ之ヲ與フ宜シク其年ヲ假シテ其志ヲ成スヘキニ何ソ乃チ之レニオチ與ヘテ又輒チ之カ年ヲ奪フ終ニ之レサレテ其志ヲ遂クルヲ得サラシム所謂天道者果シテ何ノ心ソヤ天保九年駕ニ陪シ東下ス十一年二月十八日芝赤羽藩邸ニ歿ス年三十九麻布金生山西福寺ニ葬ル古川甫英ハ實藤節菴ノ弟ニシテ古川元迪ノ養子ナリ元迪外科ヲ以テ官醫タリ甫英亦其業ヲ繼キ江戸ニ遊ヒ幕府ノ醫官桂川甫賢ノ門ニ入り專ラ其業ヲ修ム業大ニ進ム其業

古川甫英



ヲ開クニ及ンテ遠近治ヲ請フ者多シ而レテ其技術人意ノ表ニ出ル者多シ此ノ時ニ當リ本科ニテ久留米地方ニ名ヲ轟シハ宇治田雲嶂トス外科ニテハ甫英トス文政九年醫師列ニ任シ月俸十人口ヲ賜フ天保十二年六月十九日歿ス寺町妙正寺ニ葬ル

北村文周

北村文周ハ北村一溪ノ一族也弱冠京師ニ遊ヒ專ラ醫業ヲ修ム然ルニ文周貧困ニシテ學資ニ乏シク其業ヲ修ムルコト能ハサラントス此ヲ以テ晝ハ讀書醫業ニ刻苦シ夜ハ市街ヲ縦横シ按摩ヲ以テ學資ニ充ツ三百六十日一日ノ如シ其艱苦知ルヘシ其業ヲ開クニ及ンテヤ名聲藉々遠邇治ヲ請フ者鮮ナカラス天保十五年官召レテ醫師並ニ列シ月俸十人口ヲ賜フ後累遷シテヒ役格ニ進ミ祿百石月俸五人口

ヲ賜フ文久二年九月四日歿ス文周為人俊敏ニシテ逸才アリ宇治田雲嶂ノ後久留米ニテ治術ニ人ノ信ヲ得ル者文周ヲ推サレテ得ス弟節齋文周ノ業ヲ繼キヒ役助トナリテ其祿ヲ繼ク

松下養安

松下養安ハ父ヲ壽菴ト稱ス世々我藩ノ侍醫ニシテ祿百五十石ヲ食ミ竹間並格ニ班ス義源公ノ病メル時王人典藥頭百々奥陸守及ヒ蘭醫小石拙翁ヲ招カル養安ハ專ラ拙翁ノ說ヲ主張セシテ以テ罪ヲ得侍醫ヲ免ス然レヒ此時ヨリシテ漢方醫ノ拙陋ニシテ爲ルコトアルニ足ラサルヲ悟リ弟牛嶋養朴子元芳濟民等ヲシテ大坂緒方享菴ノ門ニ入り專ラ蘭醫法ヲ修メシム兼テ詩ヲ嗜メリ其勿來關ノ詩ニ曰ク馬蹄蹴破奥州霞。百戰經年未返家。邊地春風吹鐵甲。停鞭且

賞古關花。

松下元芳

元治二年正月十八日歿ス年六十一子元芳父ノ祿ヲ繼キ侍醫タリ弱冠ニシテ廣瀬淡窓ノ門ニ入り又中嶋泰民ニ就キ蘭書ヲ學ヒ後緒方享菴ノ門ニ入り刻苦勉勵深ク學理ヲ究ムルヲ得タリ慶應年中江戸赤羽藩邸ニ在リ今井義敬英學校ヲ我藩ニ興スノ志アルヲ以テ官ニ建議シ元芳ヲシテ福澤諭吉ノ慶應義塾ニ就キ英語ヲ學ハシム初メ元芳ノ大坂緒方享菴ノ塾ニ在リシ時諭吉モ亦同塾ニ在リ元芳ニハ兄事セシナリ今元芳慶應義塾ニ入ルニ及ソテソノ故ヲ以テ專ラ賓客ヲ以テ待遇セリ其塾中ニ在ル久シカラスレテ英語ニ通シ歸リテ英學ヲ起スノ志ニテ官ニ請ヒ英書ヲ數多購求シ歸國セルニ久留米ノ形勢大ニ變シ攘夷黨跋扈セ

ルヲ以テ遂ニ其志行レス諭吉元芳ノオアルヲ以テ頻リニ出京ヲ促ス且ツ長崎病院ヨリモ之ヲ招ケル藩ヨリ出サレメス明治二年十二月歿ス年三十九其辭世ノ詩ニ曰ク  
出漢入蘭又學英。羞吾強仕未成名。對鏡啞然還一笑。鬢邊染出雪千莖。

飯田方秀

飯田方秀文字ト稱ス三浦郡蘆塚村浪人江頭梅吉ノ家借也弱冠宇治田雲嶂ノ門ニ入り專ラ醫術ヲ修ム頗ル治術ニ通ス義源公ノ病アルニ雲嶂旣ニ没シ良醫ニ乏シキヲ以テ石橋猷菴ト共ニ雲嶂ノ高足弟子ナルヲ以テ弘化二年官醫ニ命セラル月俸七口ヲ賜フ對鷗公ノ時ニ至リ累還レテト役格ニ進祿百石月俸五人口ヲ賜フ元治元年五月十七日歿ス石橋盛常猷菴ト稱ス上妻郡當條村川下廣ノ人ナリ父ヲ有隣

石橋盛常

ト稱ス母ハ清水氏文化六年四月八日生ル世々醫ヲ業トス  
弱冠ニシテ田中純夫ノ門ニ入り後宇治田雲嶂ニ從ヒ夙夜  
怠ラス頗ル治術ニ通ス高足弟子ノ稱アリ其ノ業ヲ開クニ  
及シテ遠近治ヲ請フ者多シ義源公ノ病アルニ雲嶂既ニ歿  
シ良醫ニ乏レキヲ以テ飯田文亭ト共ニ召シテ官醫トス月  
俸七人口ヲ賜フ對聯公ノ時ニ及シテ累遷ヒ役格ニ進ミ祿  
百石月俸五人口ヲ賜フ後退隱シテ郷里ニ歸ル明治二十二  
年十一月十五日歿ス享年八十有一猷菴爲人方正ニシテ氣  
概アリ患者ニ接スル懇切周到其異常ノ病ニ至テハ一々筆  
記シテ保存セリ安政五年流列羅病ノ流行スル時微温湯ニ  
鹽ヲ和シ患者ノ腹ヲ温メ大ニ奇効ヲ奏セリ其他鼠毒ヲ療  
スル等人意ノ表ニ出ツル者多シ兼テ本艸學ニ通シ其退隱

スルニ及シテ山野ヲ跋渉シ藥艸ヲ採リ田園ニ栽培シ自ラ  
耒耜ヲ握リ老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラサルモノ、如ク  
ナリキ

菅原良朔

菅原良朔肥後村井陳壽ノ門ニ入り專ラ古法ヲ修ム旁ラ書  
籍武器茶具等ヲ愛シ財ヲ得レハ必ズ購求ス復タ一錢ヲ蓄  
ヘス故ヲ以テ世ノ異書珍物凡ソ人ノ欲シテ得難キ所ノモ  
ノ其家堆積餘リアリ乃チ時々屋ヲ仰キ笑テ曰ク天我ニ賜  
フト後嘉永二年官之ヲ召シ祿ヲ賜ヒ醫師列ニ班ス

玉井養純

玉井養純ハ豊後日田郡ノ人ナリ生テ穎悟艸角喜シテ書ヲ  
讀ム長スルニ及シテ廣瀬淡窓ノ門ニ入り夙夜刻苦終ニ廣  
門ノ高足タリ後筑後ニ來リ醫ヲ谷神中垣ニ學ヒ從遊數年  
學成リ業ヲ生葉郡隈上村ニ開ク其醫學ニ於テハ深ク古方

ナ信シ專ラ傷寒論金匱ヲ改ム著書若干卷アリ咸ナ張氏ヲ  
祖述ス他ノ百家ノ書手ニ觸ルヽヲ屑トセス然ルニ某年惡  
痘流行感スルアリ痘疹論一卷ヲ著ス此ヨリ而往修身ノ處  
方復タ長沙ノ遺範ヲ出テス其自信ノ篤キ率チ此ノ如シ名  
大ニ揚リ遠近來テ治ヲ請フ者多シ而シテ門人四方ヨリ笈  
ヲ負ヒ陸續絶エス其業ヲ卒ヘ家ヲ成ス者幾ント二百餘人  
我辭之ヲ聘シ擢シテ侍醫トシ醫學教授ヲ兼ヌ俸十口ヲ  
給シ居數年郷ニ歸リ病ヲ養フ爲人端毅ニシテ溫雅悃悃人  
ニ接ス嘗テ言フ正方正ヲ磨シテ一大圓正ヲ成ス是レ全人  
此言蓋シ實踐ヨリ發ス明治十一年十一月歿ス年七十  
工藤令謙同ト稱シ初メ玄東ト稱ス東臯紫洋又醫々堂ト號  
ス豐後杵築ノ人ナリ考テ蓮齋ト稱ス令ハ其第二子ナリ享

工藤令

和元年六月生ル家世々漢醫ヲ以テ業トス漢醫ノ爲ルアル  
ニ足ラサルヲ慨シ文政四年時ニ年二十二奮然蹶起長崎ニ  
遊ヒ蘭醫悉穀爾篤氏ニ就テ醫術ヲ研究ス同七年八月天文  
司高橋某ト云者日本實測地圖ヲ同氏ニ贈ル國禁ニ抵觸ス  
ルヲ以テ長崎ノ居留ヲ放逐セラル因テ其門人四方ニ離散  
ス謙同モ逃レテ高野長英竹内玄洞等ト前後江戸ニ出テ宇  
田川榛齋ノ門ニ入り醫術ヲ修ム十二年再ヒ長崎ニ遊ヒ留  
ル數年天保三年業成リ故國ニ歸ラントシ久留米ヲ過キ偶  
瀕死ノ病者アリ素ヨリ藩醫ノ望ミヲ絶ツ所トス乃チ之ヲ  
療レテ功ヲ奏セリ是ヨリ土人ノ景仰スル所トナリ終ニ留  
リテ業ヲ開クニ至レリ此ノ時ニ當リ久留米地方ノ醫術漢  
方ノミニテ謙同ノ施術ニ驚キ嫌忌誹謗相共ニ協力シテ放

逐セシコトヲ務メ數々寓居ヲ襲ヒテ學術ヲ討論レ或ハ儒者ヲ誘ヒ經傳字義論ヲ以テ刺撃ヲ加フ謙同泰然動カス事理ヲ辨明應答セリ然レモ當時ノ名醫宇治田雲嶂北村文周松下養安等ノ如キハ竊カニ蘭醫ノ理論ニ感スル所アリキト云天下ノ末年ニ至リ山本純達田山甫嶋寛造等輩出蘭醫法ヲ攻ム爾後時勢變遷シ西洋醫術漸ク勢力ヲ得安政万延ノ際ニ及ンテ牛嶋養朴宇治田東咳北村節齋中嶋泰民松下元芳等名手輩出スルニ至ル者謙同其首唱タルヲ以テ久留米西洋醫ノ鼻祖ト稱セサルヲ得サルナリ性澹泊寡慾豪邁ニシテ度量アリ人ニ接スル勲直事ヲ談スル事理分明ニ達セサレハ面折抗言シテ止マズ嘗テ國老某ヨリ屢々官途ニ推薦セシモ固辭シテ出テス文久元年六月七日歿ス年六十

一其交遊スル所池尻葛覃佐田竹水眞木紫灘等ナリ秀ヲ畫テ好ミ芥子園ノ法ニ倣ヒ密畫ヲ能クス世ニ紫洋小史ト題スル者ハソノ墨蹟ナリ

山本順達

山本順達ハ父ヲ周民ト稱ス世々官醫ニシテ祿百石ヲ食ム順達文化十二年生ル天保三年父周民ニ隨行シ江戸ニ至ル四年周民ニ隨行歸國スルニ及ヒ路上伊勢桑名ニテ周民病歿ス順達獨リ歸國ス再ヒ東遊シ留學五年頗ル蘭醫術ヲ修ムルヲ得タリ西歸業ヲ開クニ及ンテ當路ノ貴顯ト議論協ハス居常快々樂シマス一タヒ譏責ヲ得格祿ヲ奪ハレ再ヒ譏責ヲ得久留米ヨリ三里外ニ放逐セラル御原郡稻敷村ニ居レリ文久元年歿ス年四十七順達爲人磊落ニシテ邊幅ヲ修メス官醫ニテ初テ蘭醫方ヲ唱ヘレハ順達ヲ以テ嚆矢ト

中島泰民

中島泰民ハ御井郡戀ノ段村莊屋某ノ子ニシテ中島仙登ノ養子タリ天保七年俸三人口ヲ賜フ安政二年醫師列ニ班シ俸十人口ヲ賜フ泰民少壯ニシテ文才アリ此時ニ當リ漢方醫技術ノ拙陋ニシテ藥味ノ粗惡ナリシテ厭ヒ山本順達工藤謙同ノ徒蘭醫ノ技術ヲ傳ヘ宇治田東岐北村節齋牛島養朴等大坂緒方享髦ニ就キ蘭學ヲ學ビ頗ル其術ヲ得タリ後ナ泰民享菴ノ門ニ入ルニ及シテ初テ蘭書ニ通シ學理ヲ究メタリ西歸開業スルニ及シテ遠近業ヲ請フ者多シ惜哉開業歳カニ數年未タ十分ノ技倆ヲ施スニ及ハスレテ歿ス然レモ我カ久留米地方ニ西洋ノ現書ニ通スル者泰民ヲ以テ嚆矢トセサルヲ得ス

桂 永壽

桂永壽ハ久留米細工町ノ人ナリ江戸二本榎ニ居住セリ宗珉ノ傳ヲ得金銀銅鐵ノ彫刻ニ妙ナリ最モ牛馬等平和柔順ノ彫刻ニ練達セリ其子ヲ宗瑜ト稱ス父ノ業ヲ繼キ孫モ亦宗瑜ト稱ス松本町ニ居住セリ

桂 永保

桂永保ハ原名ハ松浦屋宗左衛門ト稱ス永壽ノ門ニ入り彫刻ニ巧ナリ永壽桂ノ姓氏並ニ永ノ一字ヲ與ヘ桂永保ト稱ス永保ハ獅子虎彪等ノ猛烈勇壯ノ彫刻ニ長セリ後ナ士籍ニ列シ久留米莊島小路ニ居住セリ

三谷永伯

三谷永伯邑信ト名ク祖父等悅父安俊皆畫ニ巧ナルヲ以テ我藩ノ畫師タリ永伯ハ狩野永眞永叔ノ教ヲ受ケ名聲アリ寶永七年永叔ヨリ狩野ノ姓氏ヲ與ヘテ其畫才ヲ賞ス三谷家往々狩野ノ姓氏ヲ犯ス者ハ之ニ權輿スト云梅巖公久留

狩野永錫

米城ヲ修理セラル、ヤ千鶴黃帝芭蕉若松曲水千鳥等各所  
 金壁障子ヲ畫カレム正徳五年公其功ヲ賞シテ祿八十石ヲ  
 賜フ元文四年十二月十二日歿ス子永雪白信ト名ク狩野永  
 叔祐清ノ門ニ入り家業ヲ修ム孫永錫映信ト名ク兩高齋ト  
 號ス狩野永徳ノ門ニ入り天明五年永徳ヨリ永ノ一字ヲ許  
 ス六年狩野ノ姓氏ヲ與ヘ信ノ字ヲ許ス樺島石梁ト交際親  
 密ニシテ畫名徳望並ヒニ高ク寛政三年法橋ニ任ス五年法  
 眼ニ進ム六年醫士末列ニ進ミ更ニ年銀二百目ヲ給セラル  
 文政五年六月廿三日歿ス曾孫勝浦友信ト名ク玄孫勝竹主  
 謙ト名ク勝竹ノ子ヲ友林主郷ト名ク皆家業ヲ繼ク友林ノ  
 後ヲ三雄義信ト名ク左京之進ト稱ス畫業上達セリ後國事  
 犯ヲ以除族セラレ明治十三年七月歿ス

三谷永恕

三谷永恕淵信ト名ク含章齋ト號ス父永立安俊ノ弟ナリ安  
 俊ト同ク永眞ノ教ヲ受ケ我藩ノ畫師タリ永恕永叔ノ門ニ  
 入り永叔ヨリ狩野ノ姓氏ヲ與フ久留米城修理ノ時ニ及ヒ  
 テ永伯ト同ク柳ノ間以内耕作鎮等ノ各所ハ皆永恕ノ畫ス  
 ル所ナリ祿八十石ヲ賜フ後梅巖公ノ像ヲ畫セレメ江南山  
 梅林寺ニ藏セラル別家レテ江戸藩邸ニ定居ヲ命セラル是  
 ヨリ子孫世々同所ニ住居ス寶曆十一年七月歿ス

三谷永就

三谷永就資信ト名ク尙古齋ト號ス曾祖元就柳氏ト名ク桃  
 花齋ト號ス永恕江戸ニ別家スルヲ以テ家名ヲ相續レ箕裘  
 ノ業ヲ嗣ク正徳中梅巖公城中ノ金壁障子ヲ畫カレメラル  
 ル時元就モ各所ヲ畫カレム祖宗恕主邑ト名ク梅隱子ト號  
 ス又一寒亭ト號ス父仙八主景ト名ク一陽亭ト號ス永就安

永七年父ニ隨ヒ江戸ニ行キ父並ニ三谷祐八ト共ニ三十六歌仙ヲ畫キ狩野祐清ノ門ニ入り寛政二年祐清狩野並ニ信ノ一字ヲ許ス同九年法橋ニ任レ文政四年法眼ニ進ム醫師末列タリ八年十一月十三日歿ス其子勝波方信ト名ク凌雲齋ト號ス狩野伊川院榮信ノ門ニ入り文政九年師家晴川院養信ヨリ晴ノ一字ヲ與ヘ晴波ト改ム後法橋法眼ニ任シ醫師末列タリ明治二年九月二十七日歿ス晴波ノ子ヲ有信トス始メ勝澤ト稱ス後今名ニ改ム家學ヲ繼キ繪事ヲ善クス維新ノ後ニ至リ教育事務ヲ司トリ後士族ノ爲メ赤松社ヲ創立レ專ラ殖産興業ニ從事セリ

田中榮成

田中榮成傳左衛門ト稱ス寛政二年跡目相續馬廻組タリ三年檢見役ニ任ス享和二年郡中田畑荒地開發方兼帶文化九

平井種八

年江戸地居勘定加役同十一年馬廻組頭格ニ進ミ文政七年先手物頭ニ進ム榮成爲人沉靜曆算ニ精シ蓋シ入江平馬ノ傳ヲ得レモノナランカ

平井種八文化十一年徒士組タリ天保十一年檢見方目付ニ任ス榮成ノ門ニ入り算術ニ精シク性眞率邊幅ヲ修メス其官途往來ニ算術書及測量圖等數養ヲ懷裏ニ插メリ新川鑿ノ議起ル久留米ヨリ若津マテ五里間ノ高低ハ悉ク種八ノ擔任測定スル所ナリ人ト交ルニモ質素ニシテ物薄ク情厚キノ風アリ

松岡逸衛

松岡逸衛ハ父ヲ右仲ト稱ス醫ヲ業トス逸衛幼ニシテ自ラ奮テ曰ク人ノ此ノ世ニ在ルヤ何事カ自ラ爲スヘカラサラシ是ニ於テ讀書及ヒ書畫ヲ師傳ヲ求メス晝夜獨學勉強ス



其十五六歳ニ至ルモ近傍ノ人ソノ面貌ヲ知ルモノナシ而シテ逸衛最モ書ヲ好メリ董其昌ヲ學ヒ頗ル得ル所アリ一日父右仲逸衛及ヒ二女ヲ携ヘ京師ニ遊ヘリ逸衛諸名流ノ間ニ揮毫スルニ及ヒ自ラ其技ノ及ハサルヲ知リ西歸スルニ及ンテ益刻苦天間獨立ノ筆意ヲ學ヒ其妙ニ至レリ我カ久留米地方書家ヲ以テ名ヲ顯ス者逸衛ヲ以テ巨擘トス傍ヲ擊劔ヲ好メリ是亦師傳ヲ求メスシテ單獨刺撃シテ練熟セリ而シテ修身妻ヲ娶ラス其二妹亦女工ノ織紵裁縫等師傳ヲ求メス自得セリ二妹共ニ修身嫁セス逸衛歿スルニ及ヒ二妹家ヲ維持セリ姉又歿シテ妹一人ニテ家ヲ維持シ妹歿スルニ及ンテ松岡氏祀ヲ絶テリ

野田俊益ハ筑前ノ人ナリ陸盧ノ風ヲ好ミ土屋宗俊ノ門ニ

野田俊益

吉和道元

帶屋宇兵衛

松木清之進

入リ茶式ノ奥旨ヲ究メ其技ヲ以テ寛文中我藩ニ筵任ス弟子尤多シ九十八歳ニテ歿ス

吉和道元圍碁ノ妙手ニシテ其名四方ニ鳴ル初メ江戸ニ在リ本因坊ノ阿衡タリ竟ニ其技ヲ以テ元祿元年我藩ニ聘セラル祿二百五十石ヲ食ミ享保十一年歿ス

帶屋宇兵衛ハ象戯ニ妙ナリ關以西ニハ之レニ敵スル者ナカリキ嘗テ其ノ江戸ニ在ルヤ赤羽久留米藩邸殿上ニテ其技ヲ戰ハシ公覽ニ供セリトソ

松木清之進ハ松木廣太ノ養子ニシテ大良公ノ寵臣ナリ寶生彌五郎ノ門ニ入り能太夫ニ進ミ其技頗ル妙ニ至ル屋敷ヲ榎原小路柵門ノ側ニ賜ヒ家屋悉ク官ヨリ建築シ能舞臺及ヒ公ノ居館マテ設ケラレタリ初メ清ト稱ス實ハ吉田八

平ノ三男ナリ文政六年能小方ニ召抱ラレ弁當料ヲ賜フ七年四月十一日月俸三口金四兩ヲ賜フ八年三月十五日江戸ニ於テ能方ヲ命セラレ俸二人一步口六石四斗ヲ賜フ十一年十二月能大夫並ニ命セラレ俸三人一步口九石ヲ賜フ十二年十二月奏者番支配ニ命セラレタリ十三年四月清之進ト改名ヲ命セラレ天保二年八月徒士格タリ六年三月中小性格ニ至レリ安政四年八月六日歿ス年三十七同姓松木卯三郎モ亦其技清之進ト相伯仲セリ井上市郎右衛門ハ鷲仁右衛門ノ門ニ入り文政五年能役者家業上達セシメ師家門弟ノ内慶長以來重キ傳授等モ受ケシヲ以テ徒士並ニ任シ後徒士格ニ進ミ其技妙ヲ得釣狐ノ技等最モ妙トス弟八郎モ亦其技妙ヲ得タリ

井上市郎右衛門

自然堂山布留

自然堂山布留ハ上妻郡福嶋町ノ人ナリ夙トニ誹諧ニ妙ナリ其西京ニ遊ヒシ時一日人丸社ニテ追善ノ會集アリシヲ以テ竊カニ遊覽ノ爲メニ參詣セシニ諸人山布留ヘ會席ヘ來ルヲ勸メシモノアルヲ以テ山布留席末ニ坐ス諸人吟咏口ヲ衝テ出テケルニ山布留ハ

ほたけくを明石たうらむ夕霧城ト

高吟セシニ諸人一同笑ヲ發セリ時ニ山布留即吟ニ

くみー翁を此代苔の下

ト詠セシヲ以一同大ニ感歎セリ後須磨浦ニテ詠セシニハ  
鑑きぬ松たけとれり須磨の月

秋津島

秋津嶋浪右衛門姓村上氏下妻郡久郎原村ノ人ナリ幼ニシテ多力長スルニ及ヒ身長六尺二寸八分相模ヲ以テ天下第

小野川才助

一ト稱ス海内ノ人其名ヲ知ラサルモノナキニ至ル寛保二  
年二月官ニ請ヒ二橋ニ於テ大相撲ヲ興行セリ性又温恭人  
ノ貧窮艱難ヲ救恤ス力士ノ徒之ヲ愛敬スル父兄ノ如シ此  
亦相撲社會ノ巨擘ナル者ナリ同三年九月二十一日病歿ス  
享年四十七村西段上ニ葬ル嗣族ナシ文政中力士楊羽空右  
衛門相撲會ヲ設ケ覽觀者ノ擲ツ所ノ錢物ヲ集メ爲メニ此  
塔婆ヲ建ツ秋津嶋ノ家嘗テ二鏡ヲ有セリ大莊屋太田黒氏  
ノ家ニ藏ス年久シキニ點翳ナシ明映新タニ磨カ如シ因テ  
其鏡ヲ塔婆ノ中空ニ置キ以テ其神ニ象ル題シテ日本第一  
秋津嶋塔ト稱ス久留米ヨリ瀬高ニ至ルノ街道ニ在ルヲ以  
テ力士ノ過クル者ハ必ス輿馬ヲ下ルト云  
初代力士小野川川村才助ト稱ス近江大津ノ人也寛政年中

二代  
小野川才助

コレヲ聘シ祿百石俸五人口ヲ與ノ小野川大日本大關ニテ  
相手ヲ谷風トシ其名海内ニ轟ク  
二代力士小野川亦タ才助ト稱ス本國山本郡高畑村森光五  
平ノ男也軀幹長大年十九ニシテ身長六尺三寸旅力超群力  
士都灘及ヒ都藤等ノ徒弟タリ大岬大五郎ト稱ス嘉永二年  
江戸ニ出テ頭取追手風ノ門ニ入り技大ニ進ム阿波候召シ  
テ之ヲ祿ス虹嶽會間右衛門ト改ム安政二年本藩之ヲ召シ  
士班ニ列ス因テ命名ヲ改ム時ニ大日本小結タリ慶應三年  
大關ニ進ム体量三十六貫目アリ明治二年京都ニ出テ大日  
本頭取タリ六年正月十三日歿ス才助性温順親ニ事ル孝養  
頗ル至ル全郷之ヲ稱ス妻常ト名ク追手風ノ女ナリ二男ヲ  
生ム長男幾太郎ト稱ス西京ニ住ス二男ヲ喜三郎ト稱ス義

叔ノ家ヲ繼ク

青木清秀ハ鍊鐵ニ妙ヲ得タリ其京都ニ在リシ時鴨河ノ水ヲ以テ鐵笛鐵弓等ヲ製レ弘化年中義源公ニ獻セリ公之ヲ愛シ村上量弘ヲシテ鐵笛記ヲ作ラシム其記ニ曰ク

我久留米府劔工有青木清秀者以良工稱長於鍛鐵製造百器備極其妙近遊京師汲鴨水而鍛者二年矣名聲大著及歸獻其所製數種皆可喜者而其尤者爲鐵笛笛名芙蓉山鷹司相公之所命也初清秀製鐵笛京人爭傳達於相公相公賞其良既而愴然曰吾於此笛重有感焉吾及事光格帝帝妙於音律嘗求鐵笛而所得者皆不中用會聞富士坊中藏古鐵笛致之禁中器良音協帝大珍賞然以其爲山坊舊物卒返之爾後數求鐵笛遂無中用者乃欲再致富山物吾嘗親奉天語矣而未果也皇天降禍仙駕遠逝欲追隨之查乎無由矣今觀此笛忽憶

先帝平昔不覺淚傾願得而藏之春雨秋霜時一弄之以洩悲慕之念垂復憾矣乃使其臣小林某請于清秀清秀鄙人樸野無所矯飾答曰某久留米人獨知有我侯而已不知更有天下之權貴也某所以研精於斯業者將以報於

我侯也以下其所以報於我侯者而輸之他人非某之心也清秀既以是辭于使者更介我京都吏前田某請相公名此笛相公悅曰我以憶先帝請之矣而彼以獻

國主辭焉其意一也已此笛之良天下不容有二矣可以與富山物爭高請名之曰芙蓉山歸獻國主以爲永寶蓋富山之秀天下無二故又名不二一芙蓉相公名此笛取於斯云於是清秀感喜歸則申有司以獻我公亦珍焉清燕之間命近臣作詩文以言其事而臣亦與焉臣於音律固所不曉其又何言然臣於此笛蓋亦有感焉相公之請非玩物也而有憶先帝之忠焉清秀之辭非愛寶

也、有思國君之義焉、是知君臣之義根乎天性、尊之焉、天朝之宰相、卑之焉、播之工匠、入居禁園咫尺之近、出居江湖万里之遠、其思君之情、蓋無毫髮之殊矣、凡物雖有足以感人者、非有心者、鮮有感焉、今夫此笛之良、凡曉音律者、皆能知之、然求其感之之深、如相公者、必無有也、何有心與無心也、至若此笛得名之由、使無心者聞之、未必感、而有有心者聞之、蓋有感極而不能已者矣、伏惟我公蒞治、夙夜孜孜、絕無玩好之樂、而獨珍此笛者、固亦有所以感焉、至其所以焉感者、豈臣輩之所能窺哉、豈臣輩之所能窺哉、

丙午歲三月

臣村上量弘謹記

田中久重初、儀右衛門ト稱ヌ宮家ノ許ヲ得近江大掾ト稱ヌ筑後久留米ノ人ナリ寛政十一年九月十八日生ル久重幼ニシテ慧敏機巧ヲ好ミ覃思精研九歳ニシテ初メテ硯函ヲ製ス其製常品ニ異レリ其後竹輪水揚懷中枕等ヲ製シ二十

二歳ノ時風砲ヲ製ス文政年間我久留米ニテ五穀神社祭禮ヲ頻々舉行セリ是ヲ御繁昌ト稱ス其時々水機關ヲ以テ偶人ヲ舞蹈シ簫笛ヲ吹カレム觀ル者歎賞セサルハナレ久重四方ニ周遊シ益技術ヲ究ント欲シ家ヲ弟彌右衛門ニ譲リ文政七年肥前肥後京都大坂等ニ遊ヒ八年江戸ニ遊ヒ兩國橋ニ於テ水機關ノ技ヲ示ス其名一時ニ鳴ル天保五年其大坂ニ寓スルヤ大鹽平八郎ノ亂ニ遭逢シ家屋器具等悉ク燒亡セリ伏見ニ移住ス此ノ時ニ當リ時辰儀ヲ用ヒ日月星辰ノ行度ヲ自轉ナサレメンテ發明セシニ日月循環ノ遲速算術上ノ眞理ヲ求メンカ爲メ天文家戸田久左衛門ニ就キ梅小路家ニ入門シ東修金五拾兩ヲ收ム梅小路家ハ京都ナルヲ以テ伏見ヨリハ路程二里毎日黄昏ニ家ヲ出テ夜半ニ

歸家セリ五十日一日モ怠ラス遂ニ其業ヲ卒ルヲ得タリ後  
 京都ニ住スルニ及ヒ須彌山儀縮象儀万年自鳴鐘等ノ製造  
 ハ悉ク此ニ基セリ万年自鳴鐘ノ如キハ今猶東京上野博物  
 館ニ存セリ其他無盡燈防火器械等ノ製造悉ク久重ノ創始  
 ナリ嘉永五年汽船雛形二艘ヲ製造ス一艘ハ車輪形ナリ一  
 艘ハスクチール形ナリ鷹司相公之ヲ聞キ庭水ニ浮ヘ覽觀  
 セラル東本願寺大谷氏モ亦覽觀レ皆深ク感賞アリテ物ヲ  
 賜フ後膳所藩士奥村某之ヲ請ヒ湖水ニ浮フ實ニ皇國ユテ  
 汽船ヲ製造スル此ヲ嚆矢トス安政元年鍋嶋閑叟老其名ヲ  
 聞キ之ヲ聘レ精練所ニ居ク專ラ汽船汽罐及ヒ大小ノアル  
 ムストロング螺旋砲ヲ製造セリ此アルムストロング六封度ノ大  
 砲ハ明治元年會津戰爭ノ時著シ  
 奏ク功ヲ幕府ヨリ品海臺場ノ大砲鑄造ヲ佐賀ニ命スルニ及ヒ

久重專ラ鑄造ニ從事レ成功スルニ及ヒ幕府ヨリ銀五枚ヲ  
 賜フ且又十馬力小汽船器械共盡ク製造佐賀ヨリ幕府ニ獻  
 セレテ以テ是亦賞賜アリト云後久重ニ命レ長崎ニ趣キ蘭  
 人大機關士某ニ就キ其術ヲ研究ス某久重ノ製造スル所ノ  
 器械ヲ見テ賞賛措カズ是ニ於テカ久重ノ名益著レ技益進  
 ム我藩ニテ文久ノ際ニ至リ初ラ汽船ヲ購求スルニ及ヒ久  
 重ヲ招ク久重一月中十五日ハ佐賀ニ在リ十五日ハ久留米  
 ニ在リ双方ノ事務ニ從事セリ後久留米ニテ智巧練熟ヲ以  
 テ下士ニ班レ月俸ヲ賜フ養子儀右衛門ヲ佐賀ニ遣レ自ラ  
 家族ヲ聚テ久留米ニ歸レリ蒸氣器械製造ノ監督タリ又大  
 砲製造場ヲ建立レ銅製八十封度アルムストロング砲及ヒ  
 三十封度砲其他許多ノ小銃ヲ製造セリ慶應二年今井榮ニ

從ヒ清國上海ニ遊ヒ氣船帆船數艘ヲ購求ス頗ル發明スル所アリ明治六年久重年七十五歳翻然東京ニ出テ製鐵事業ヲ起セリ事業次第ニ繁榮レ數十人ノ工夫ヲ役スルニ至レリ十四年十一月七日歿ス年八十三青山墓地ニ葬ル久重爲人沉默一事ヲ爲サント欲スレハ晝夜深思精慮老ニ至ルマテ衰ヘス養子儀右衛門先歿スルニ及ヒ再ヒ金子六兵衛ノ弟大吉ヲ養子トス大吉後久重ト改ム父ノ遺業ヲ繼キ益事業ヲ擴張レ製鐵場ヲ芝金杉海邊ニ移レ練瓦石屋數棟ヲ建築レ煙突空ニ聳ヘ黑煙天ヲ衝ク東京市中私立ヲ以テ製鐵事業ヲ起ス者恐クハ久重ノ右ニ出ツル者鮮カラシ抑故久重年七十五故國ヲ出テ東京ニ至リ大事業ヲ起ス如キ他人ニ在リテハ退縮隱遁風月ヲ樂ムノ年ニシテ有爲活潑ノ氣

老テ益壯ナル者亦人ノ企テ及フベカラサル所ナリ

久留米小史卷之二十一終

久留米小史卷之二十二

船曳 鐵門校正  
戸田 幹編纂

第四

農

農ハ古來豪族アリ諸方ニ割據シ戦争ヲ事トセシハ史傳ニ  
往々傳ハレリ特ニ有馬氏入封前後ヨリ開墾水利灌漑等ニ  
大功アリシハ三瀨郡中古賀村ノ緒方將監ノ瀧島道海島等  
ヲ開墾シ上妻郡古賀村ノ稻員安則ノ上妻諸村ノ堤防ヲ築  
キ溜池ヲ鑿ツ下妻郡中島村庄屋市郎兵衛ニ藩ヨリ竿撿下  
問アラセラレシヲ以テ覺書ニテ意見ヲ奉レリ草野又六ノ  
正徳竿撿ニ於ケル床島堰ノ議起ルヤ稻吉八重龜鏡高島ノ



庄屋等恍惚智數アリ方畧ヲ具ス藩又六ニ命シ竣功ニ至レ  
リ田代重榮吉井町ノ大庄屋タリ自ラ銀ヲ擲テ袋野ノ山麓  
ヲ鑿テ河水ヲ引キ生葉郡ノ田千二百町ニ注ケリ小郡町伊  
吉ノ檀實培養ノ業ヲ開キ伊吉檀ノ名他邦ニ傳ハレリ笠九  
郎兵衛ノ土地ヲ開墾シ蟹爪ヲ創始シ砂糖培養製造等ノ業  
ヲ傳ヘタリ大良公時代ヨリ兩郡御原ノ水害ヲ除カント欲  
シ前ニ安屋野大庄屋田中政太郎アリ後ニ十郎丸大庄屋田  
中政義アリ終ニ其志ヲ遂クル能ハス政義ハ維新後内務省  
ヨリ土木技師出張筑後川工事ヲ起スニ及ヒ政義發憤興起  
東西ニ奔走水害ノ意見ヲ建議シ工事緒ニ就クヲ得政義ノ  
志達スルヲ得タリ

緒方將監

緒方將監惟道ト名ク三郎惟季ノ裔父宮内少輔ト云者豊後

大友氏ニ臣屬ス大友氏衰ヘ三瀨郡中古賀村ニ隱ル將監勇  
ニレテ智數アリ村邊斥鹵ノ地ヲ相レ闢キテ水田トスヘキ  
ヲ相レ文祿中始メテ之ヲ開墾セリ數年ニレテ田七町余ヲ  
得タリ名ケテ瀉島ト云フ寛永中ニ至リ益レテ二十余町ニ  
至ル又筑後河ヲ隔テ本國ノ地アリ近ク肥前地方ニ接屬ス  
肥人相議レテ之ヲ水田トセントス慶長十五年春將監家長  
近藤清右衛門及ヒ村民若干ヲ率テ屢戰テ之ニ克ツ肥人逃  
レ去ル遂ニ田五十余町ヲ闢ク是ニ於テ中古賀ノ民ヲ移レ  
田廬ヲ與ヘ其地ヲ名ケ道海島ト曰フ將監併テ二村ヲ監ス  
農耕ヲ勸メ其民ヲレテ養喪憾ミナカラシム二村ノ整然一  
聚落ヲ爲ス者將監ノ功ナリ寛永十七年八月二十六日病歿  
ス二村ノ民將監ノ恩ヲ思ヒ春秋仲月二十六日ニハ必ス相

賴員安則

會レテ冥福ヲ修ス文政四年秋八月鎮城靈神ノ碑ヲ建ツ皇人吉田從二位卿將監ノ功ヲ賞レテ賜フ所ノ號ナリ

賴員安則ハ上妻郡古賀村ノ人ナリ世々大莊屋タリ其先世右京大夫良參ナル者正應年中古賀村其他近傍ニ於テ田數百町ヲ有レ豪族ニレテ所謂小名ナル者ナリ永正年間主計頭良維豐後ノ大友氏ニ屬セリ安守安直豐臣秀吉征西ノ時ニ至リ領地ヲ及收セラル筑紫廣門其流落ヲ愍ミ古賀村ニ於テ田若干箇一字ヲ給與ス安守ヲ大莊屋ニ補ス後安直安守ニ代レリ是レテ安則ノ祖父トス父ヲ安茂ト稱ス寛文元祿ノ際ニ至リ上妻郡中大田高間椿原清樂當條久泉藤田一條北河内吉常長延内田甘木増永川瀨牟禮知徳藏數田本大籠等諸村ノ間ニ於テ堤防ヲ築キ溜池ヲ鑿テ灌溉ノ便ニス

市郎兵衛

ル者悉ク安則ノ功ナリ

下妻郡中島村莊屋市郎兵衛ハ瓊林公ノ時公ニハ均田ノ志アラセラレ市郎兵衛ニ下問アラセラレテ以テ左ノ覺書ヲ上レリ公不慮ノ禍ナカリセハ均田ノ法行レ市郎兵衛ノ功ヲ奏スルコトアルヘキヲ實ニ遺憾ト云ツヘン

御領内田畑上中下撫竿檢被 仰付候間前廉之儀委細申上候様お被仰付乍恐申上覺

一天正十七酉年(天正十七年は丑年也酉ハ十三年也)迄筑後國總畝數一万八千三百餘丁但三百六十步壹メにして郡司并一人其外に一聯合と申傳拾餘人にて領知被成候同十八年戌五月薩州陣ハ十五年亥年也(大閩様薩摩陣之時右之上改易被成高に御極田方壹反一石四斗撫島一反一石撫田方百石に七町島方百石に十丁但三百歩一反ハ筑後總高三拾三萬石に極拾五萬石ハ立花左近様御居城柳川四萬石ハ立花主膳様御居城江浦四萬石ハ筑紫上野様御居城福島拾萬石小早川藤四郎様御居城久留米右四人同

十九亥年(亥年は十五年也)より慶長六丑年迄十五年御取被成候得共此内七ヶ年の高麗陣に御立御仕置確と極無御座候然内ふ文祿四年天下一統の御上檢御座候筑後國御上檢地に御奉行山口玄蕃様御付被成候細引竿檢被仰付候所に藤四郎様上野様主膳様領内右の高ふ相見申候左近様十五萬石竿檢被成候所ふ十一萬石御座候玄蕃頭様いか体に思召候の壘の上のゑぼしと被仰候貳割八歩四厘四毛御のふせ右の拾五萬石に御極被成候就夫只今迄下妻郡三瀦郡山門郡畝當り餘郡三割少く高百石に拾町ふ及申所一ヶ村も無御座右之四人衆慶長六丑年十月(慶長五子年十月廿日)八院陣後御改易被成候

慶長七寅年(六丑年と)田中兵部様當國に御入國內檢被仰付太閤様御定之通田方一反一石四斗撫畑方一反一石撫と御極め給高七十五石に被成候處に田畑出來位に應し御免相の高下被仰付其外に開と申は奉行に口分田甚左衛門と申侍開方の裁判にて處々の古城館不殘開ふ相成し其故に今迄口分田開と申傳候慶長七年より元和六年迄十九年此間の御仕置高下無御座候下々迄緩々と世渡仕候兵部様元は民にて米七石御取其後段々と御仕上筑後三十三萬石御取に相成候就夫下々の委細迄發明に無甲

乙被成候然共田中筑後守元和六年申八月御死去御代次無御座候間御改易被成候

一元和六申年の御公領と罷成三十三萬石の内筑後國中寺社領御免地と罷成殘て三十二萬八千石御代官に松倉豊後様竹中采女様岡田將監様右三人御知行高に應し御裁判被成候豊後様御知行高故筑後半分御裁判被成候豊後様掛りの百姓難儀仕候の在々ふ押入々々表物有次第に御取上げ其上にてみのおとりと申事被仰付候采女様將監様御掛りの別に相承り不申候緩々と上納仕候

一元和七百年筑後國二十一萬石

有馬玄蕃頭様拾萬八千石立花飛騨守様一萬石同民部様御拜領被成候西春當國へ御入國被成候飛騨守様民部様御先知故前廉の御帳面にて御所務被成候當御領内村々より田中様被成御所務候御免相畝高有体に書上げ申付にも御座候又田中様御代ふ御代官御側人と挨拶會釋能仕候村々も御物成受拂手形を仕直し田中様御代に千石の村の五百石共仕替三つ成は壹つ五分共仕直し高を減書上申村々も御座候然共村々より書上申高の御用不被爲遊

玄蕃頭様被遊御意候ハ百姓下々たり共五割より上ハ偽り申上間敷と被爲仰出二拾壹萬石を三拾貳萬石上せ御免相凡三つ七分の御所務被仰付候右田中様御所務の畝高有体に書上申候村々ハ倒れ致難儀候由被爲聞召上同九亥年高四萬石右倒れ村の高に應し御赦免被遊候殘て此八萬石の御物成上納仕事候然共御領内畝高上中下撫繩張竿檢不被爲仰付候に付村々大分高下御座候

一右の通にて確と極り申候帳面も無御座今度御領内高撫御帳面御極被遊候ハ向後地方に付高下出入の儀少も有御座間敷と乍恐奉存上候次に畝高撫御帳面極め差上可申定

一村々本高出目高開高只今迄御物成上納仕來分の高土免に御極今度高撫竿檢何程田畑出目御座候共畝當り計を増御帳御極可被下候只今出目開を高御極め被遊候てハ高撫しと申儀にては無御座候右の當礎と御極被爲召置向後村々畝當り出來位みて土免高下の御評議御尤に奉存上候

一村々村切に庄屋長百姓横目長百姓迄田畑坪々に立會吟味の上めて少所あても一步も落地無御座様に竿檢尤土の上中下迄極委細の繩引竿檢中帳差上可申候其上にて五ヶ村與庄屋大庄屋立會地詰仕り尤帳面にて一

村三所五所の御檢見衆御出ためし竿御打若少にても出目御座候を出目高に御極被遊其上にて其村庄屋長百姓横目尤五ヶ村庄屋大庄屋迄越度可被仰付候

一村々唯今迄高百石ふ田畑三四丁に當村々又ハ高百石に廿丁に當る村々向後田方三四丁に當る村々の百石に五丁當りに御極め可被下候五十丁より上の村にハ十丁當りに御極め可被下候畑方十丁より内の當りを十丁と御極可被下候三四丁に當る村々と廿丁と御極め可被下候土免高上下ハ御尤三四丁にて百石之諸役勤二三十丁にて百石之勤御詮議被遊可被下候

一村々村之内にも不寄田畑一反コ付三拾目五拾目百目三百目五百目買買仕田畑御望候又ハ壹兩ニ付廿目卅目四十目相添永々讓渡度々仕候ても取主無御座候て地主迷惑仕居申候田畑御座候間高撫と申儀ハ加様之所を大一に相守度奉存候併迎も一面にハ難極奉存候上田畑一反ハ付百目之賣買にて中ハ八拾目下ハ六拾目下々ハ三四拾目何之田畑にても賣買に罷成候様に御極可被下候

一村々土免御極被下候儀ハ高檢竿檢地方御帳差上た免し竿御仕廻被遊後

井四人の大庄屋は一組より小庄屋一人つゝ、添御領内を打廻田畑地之位を致見分吟味の上ふて村々斗代を極免御帳差上可申候御檢見衆様方より御極可被遊候其上御目付衆様方よりも御極可被遊候此三つの極御帳御取御吟味の上ふて村々土免御極被下候への何方も平等お罷成少も甲乙無御座様お奉存候  
右之通被爲 仰付地方御帳面認様への別帳お差上申候以上

下妻郡中島村庄屋

承應四年未二月二日

市郎兵衛

中村太左衛門様

古庄與四右衛門様

草野實秋

草野實秋又六ト稱ス爲人俊偉膽量超倫梅巖公英明治道ヲ厲精セラレ土ヲ辟キ利ヲ起サレニ實秋前後預リテ力ヲアリ正徳二年床島堰ノ議起ル御井郡諸村土美ニシテ水少ナキヲ憂ヒ筑後川ヨリ堰シテ水ヲ引クヘキヲ相シ稻數八

重龜鏡金嶋等ノ庄屋方略ヲ具ス官實秋ニ命シ役ヲ掌ラシメ庄屋等之ニ副タリ乃テ大ニ役丁ヲ募リ長渠ヲ庄島村ニ鑿テ石ヲ沉メ堰ヲ築キ河流ヲ壅ク是ニ於テ河水洶沸怒テ西注者數百千間勢漸上スルカ如シ而シテ渠腹ノ受クル所屬厭餘リアリ又渠首ニ就キ地ヲ疏シ石ヲ鋪キ以テ河ノ餘流ヲ導ク路峻ニ岸峭ニ奔瀉數曲之ヲ望ムニ降龍ノ如シ行舟ノ駕シテ本河ニ落ツル者斗折一瞬翻飛觀ル可シ是ヲ舟通ト稱ス蓋レ堰ヲナス大小凡四而レテ湫之ニ稱フ渠ハ一ニシテ下流ハ万派崇庫曲直權衡宜シキヲ得蓄洩ノ機千潦ノ度天造ニシテ地設其巧雄奇ニシテ毫モ素ニ愆ヲス功正月二十一日ニ始マリ四月十三日ニ畢ル日數八旬餘役丁ヲ用フルコト二十餘万人錢ヲ費スコト五百餘万文其填築ノ

旧代重榮

時小石ハ會シテ之ヲ苞シ苞凡五十餘万大石其幾万億ヲ知  
 ラス皆二月晦ヲ以テ一時ニ手ヲ下シ負テ之ヲ投スル者ア  
 リ船ヲ並セテ之ヲ沉ムル者アリ斯日人徒雲集行歩進退各  
 々節制アリ勞セルモノ賞アリ怠ル者ハ罰アリ是ニ於テカ  
 人氣十倍一投一沉奮厲ノ壯河水ト勇ヲ争ント欲ス觀ル者  
 魂褻ルト云フ功成ルニ及ンテ地ノ水ニ富ム者凡四十餘村  
 良田一千五百餘町ヲ得タリ渠下ノ民今ニ至リ誠腹業ヲ樂  
 ミ勞セオシテ飽キ拜シテ神錫トスル者實秋及ヒ數子ノ國  
 ニ民ニ功アル大ナリト謂ッヘシ

田代重榮彌三右衛門ト稱ス生葉郡吉井町ノ人世々大庄屋  
 タリ生葉郡中箕尾山下概テ其土礪礪水利ニ乏シキヲ以テ  
 動モスレハ早魃ノ憂アリ居民愁苦ス寛文年間重榮ノ子重

内山伊吉

仍ト議シ筑後河ノ水ヲ引キ瘠土ヲ變シ沃野トセント欲ス  
 官ニ請ヒ竇ヲ原口村袋野ノ山麓ニ鑿ツ然ルニ岩石重疊鑿  
 ツ可ラス是ニ於テ大ニ礪丁ヲ發シ上ハ嶺瀨ヨリ下ハ地藏  
 岩ニ至ル凡六千尺悉ク岩石ニ竇ヲ鑿テ河水ヲ注カシム河  
 水竇中ニ充タス是ニ於テ巨石ヲ河中ニ投スルモノ數十百  
 艘ヲ知ラス水漲キリテ激流シテ竇中ニ注ク水潛流竇中ヲ  
 出ツルニ及ンテハ溝渠分派同郡ノ田千二百町ニ注ケリ其  
 費銀百貫目ノ内ニ三拾三貫目ヲ官ヨリ賜ヒ六拾七貫目ハ  
 悉ク重榮ヨリ出銀セリ大石ノ長渠亦筑後河ノ水ヲ引キ竹  
 野山本二郡ノ田ニ漑ク亦本郡庄屋等建議シ重榮等ト鑿堀  
 セル所ナリ

内山伊吉ハ御原郡小郡町ノ農ナリ爲人篤實努力衆ニ拔ク

夙ニ厥土ノ黎墳ヲ察シ菽麥ニ宜シカラス楹樹ニ適セルヲ以テ深ク意ヲ楹實蕃殖ノ法ニ留ム或ハ其實ヲ播シ或ハ其枝ヲ接シ宿土ニ移シ陳根ヲ除キ百方經驗勉テ改良ヲ圖リ如斯モノ此ニ年アリ偶一異種ヲ得乃チ之ヲ驗スル累年實ヲ結フ一ノ如シ收穫虛歲ナシ蒂實緊着能ク風雨ニ耐フ且ツ其蠟ヲ成ス光澤透明他種ト異カニ別ナリ此ヲ以テ悉ク舊ヲ棄テ新ニ換フ他人亦靡然之レニ倣フ遂ニ一村ヨリシテ一郡ニ及ヒ一郡ヨリシテ一國ニ及ヒ殆ント天下ニ及ントス是ニ於テカ伊吉楹ノ名万喙喧傳千歲一定ス伊吉ハ享保十五年三月十五日生文化十一年八月四日歿ス享年八十有五楹ハ和訓波勢其子壓搾蠟ヲ製スベシ九州地方多ク之ヲ栽殖ス品種甚々多シ其最モ佳ナルモノヲ伊吉楹ト云フ

笠九郎兵衛

國中物産産額最段ニシテ收益最モ豊ナルモノ蠟ヲ以テ巨擘トス其國ヲ富シ民ヲ澤スルモノ實ニ廣大ナリト謂ツベシ其由來スル所ヲ察スルニ伊吉ノ功績與カテ力ヲアリ能ク惠テ天下後世ニ施ス如斯其レ偉ナリ苟モ其風ヲ聞ク者孰カ感奮興起セザラシヤ

笠九郎兵衛ハ御井郡國分村ノ農ナリ笠七左衛門ノ次子ニシテ竹野郡眞木村某ノ養子トナレリ九郎兵衛實家ニ至ル毎トニ涕泣シテ養家ニ歸ルヲ欲セス十六歳ノ時雨ヲ衝キ破笠ヲ戴キ單身實家ニ至ル父驚テ曰ク如何レテ至ル九郎兵衛洒然トシテ曰ク前脚ヲ後ニシ後脚ヲ前ニシテ至ルノミ父其歸志ナキヲ悟リ徐ロニ問テ曰ク汝如何セシト欲スト九郎兵衛曰ク他人ノ嗣トナルハ斷レテ兒ノ欲セサル所

假令飢ヲ木實艸根ヲ食フトモ兒ハ阿爺ノ傍ニ在シテ望  
ムト父又問フ汝何ヲ爲ント欲ス曰ク力耕勞動レテ自ラ別  
ニ家ヲ起サント此レヨリ九郎兵衛ハ村ノ北邊ニ流レタル  
高良川ノ沿岸浦河原ト唱フル礪礪ノ處ニ就キ石ヲ除キ荆  
棘ヲ去リ凸凹ヲ平ラカニシテ椋ノ實ヲ拾ヒ來リテ蒔キ晴雨  
ヲ分タス孜々力作無上ノ娛ミトセレカハ一兩年ヲ經ルニ  
及ヒ暮モ父兄ノ力ヲ藉ラス獨力ニテ數個ノ小畝ヲ拓クヲ  
得タリ數年ノ後ニハ幾町歩ノ田畑ヲ得終ニ家屋ヲ此地ニ  
建テ妻ヲ娶リ優ニ獨立ノ生計ヲ營ムニ至レリ此事藩主ノ  
聞ク所トナリ終ニ開墾地ノ租ヲ免ス此ヨリ九郎兵衛ノ資  
産漸次増殖シ許多ノ熟田ヲ購ヒ浦河原ノ名近郷ニ高レ水  
田ヲ耕スニハ力メテ田土ヲ軟滑ナラシムルヲ要ス故ニ從

來插秧ノ後除草ノ爲メ鋤或ハ鎌ヲ以テ田土ヲ打テ返ヌヲ  
慣習トセリ九郎兵衛其ノ人力ヲ費スノ多キヲ憂ヘ改良ノ  
志アリ寶永年間田間ヲ徘徊セシニ山蟹ヲ捕ヘタルニ蟹ハ  
逃レントレ其八足ヲ延レ泥土ヲ攪亂セリ九郎兵衛心ニ悟  
ル所アリ家ニ歸ルヤ竹片ヲ以テ蟹足様ノ器ヲ製シ柄ヲ付  
シ田土ヲ試ミシニ果シテ得ル所アリ鍛治ニ命レ鐵ヲ以テ  
製セシム數回製作完全ナル器械ノ發明ヲ遂クルヲ得タリ  
由テ蟹爪ト名ツケ數十個ヲ製シ村民ニ頒テ村民其便ヲ稱  
セサルハナレ一村ヨリシテ一郡ニ及ヒ一郡ヨリシテ一國  
ニ及ヒ遂ニ隣國ニ傳フルニ至レリ藩主ヨリ物ヲ賜ヒ之ヲ  
賞シ子孫ニ至ルマテ村內農民ノ首座タラシム延享中郡宰  
ノ内命ヲ受ケ長崎及四國ニ遊ヒ砂糖ノ栽培並ニ製造法ヲ



見聞ノ歸村ノ後數年間地質ノ適否肥料ノ善惡ヲ精思レ他  
村近郡ニモ栽培レ製造ノ法方ニ思慮ヲ盡シ夥多ノ資金ヲ  
費セレモ十分ノ好結果ヲ得ルニ至ラザリレモ子孫ニ遺言  
レテ其志ヲ繼カレム後年ニ至リ果レテ上妻郡ノ地方砂糖  
ノ産地トレテ名産ヲ出スニ至レリ亦九郎兵衛ノ功ト稱ス  
ヘレ九郎兵衛翁嫗九十歳餘ニレテ歿ス其行狀ハ官原南陸  
ノ孝子傳及ヒ池尻葛原ノ記事等ニ詳カナリ

商

商ハ有馬氏入封以來貨殖ヲ爲スモノ指屈スルニ暇アラザ  
レモ永世ニ傳フルモノ希ナリ特ニ山本氏林田氏ノ如キ累  
世奕葉家運隆昌ナルモハ實ニ地方ノ豪族富家ト稱スヘ  
レ富安氏ノ如キハ其家衰ルト雖モ善右衛門創業ノ際履歷

山本周平

ノ傳フヘキモノアルヲ以テ附記セリ近世ニ至リ富豪ノ農  
商崛起スト雖モ維新前後ノ新家タルヲ以テ採録セス  
山本周平善次郎ト稱ス寛延三年生ル始祖ヲ石原又兵衛ト  
稱ス丹波福智山ノ人ナリ春林公本國移封ノ時ニ及ヒ第三  
人ト隨從入國セリ二弟與右衛門是ヨリ先キ大坂ノ役銃丸  
ニテ股ヲ傷ケルヲ以テ久留米ニ來ルニ及ンテ郷士ヲ以テ  
居テ洗切ニトシ材木商及ヒ造酒ノ二業ヲ營メリ後十官用  
材木商ヲ命セラル是ヨリ城廓及ヒ良山梅林寺其他島原役  
日光手傳等ノ材木概テ與右衛門ヨリ上納セリ是時ヨリシ  
テ木屋ノ稱アリ兄又兵衛島原役ニ戰死セリ與右衛門其後  
ヲ繼キ其遺孤ヲ子トセリ後爲尙九太夫ト稱ス正保元年官  
命レテ洗切町ノ人家ヲ瀬下ニ移ス與右衛門モ亦同所ニ移

住セリ四代通尙小右衛門カ時ニ官米穀ノ販賣ヲ委任セリ  
通尙男子ナキヲ以テ上津荒木村庄屋山本某ノ男通平ヲ養  
フ善次郎ト稱ス其女ヲ以テ之レニ娶ハス通平才幹アリ益  
貨殖ス其長男ヲレテ石原氏ノ後ヲ繼カシメ二男平章喜左  
衛門ヲレテ實家山本氏ハ先世艸野氏ノ後胤ニテ名家ナル  
モ既ニ零落セルヲ以テ別ニ山本ノ後ヲ立テシム周平ハ乃  
テ平章ノ第三子ナリ幼ニシテ智略アリ十四五歳ノ時人ノ  
上國ヨリ歸リシ者ノ談ニ大坂ハ大都會ニシテ商業ノ盛ナ  
ル大坂高屋ノ並列セルノ狀ヲ聞キ景慕止マス遂ニ實況ヲ  
目撃セント欲シ上坂ノ事ヲ父ニ請フ父其幼童タルヲ以テ  
許サス乃テ自ラ前髪ヲ斷テ成人ノ姿ヲ示シ再ヒ請フニ至  
レリ父其志ノ篤キニ感シ終ニ之レヲ許ス此ニ於テ上坂ス

大ニ感激スル處アリ年十九歳ニシテ兄ノ造酒器械ヲ借り  
造酒業ヲ營ム別ニ父兄ヨリ財産ノ分與ヲ受ケス自ラ奴僕  
ト勞力ヲ共ニシ家業繁榮セリ然ルニ大乘公天明年間米札  
ヲ發行セラルニ至リ周平ノ豪家タルヲ以テ官周平ヲシ  
テ衆人信用ノ爲メ米札ニ署名セシム後テ米札通用澁滯ス  
ルニ及ヒ衆人其廢棄ヲ慮リ爭テ物品ヲ購求ス時ニ周平質  
商及ヒ造酒業トス米札ニ署名アルヲ以テ衆人爭テ其店  
ニ集ル是レヲ拒ムヲ得ス質物ハ拂ヒ盡シ造酒ハ賣リ盡シ  
米札通用禁止ノ令出ツルノ日ニ及ヒテハ店頭餘ス所ノモ  
ノハ楮幣ノ堆積スルト酒ノ五尺桶半分ヲ殘スノミ此時世  
上ノ狂歌ニ  
穀札のいふると人た夕立ぬ

さくもむりねもといふみねり

然リ而レテ周平モ數年刻苦勉厲シ蓄積セシ資産ヲ不慮ノ  
變難ニ遭逢シ一朝ニシテ蕩盡セルノ不幸ヲ慨歎シ遂ニ病  
床ニ臥セリ而レテ既往ヲ顧ミ將來ヲ思ヒ頑然鬼籍ニ上リ  
一生ヲ終ルハ實ニ遺憾ニ堪ヘス今一度奮發セハ豈ニ天助  
ナキヲ保センヤ偶友人來リテ曰ク君ノ技倆ヲ以テセハ何  
ソ回復ノ道ナカラシ今日ハ幸ニ仲秋ニ屬シ好天氣ナルヲ  
以テ近郊ヲ散歩セントテ共ニ歩シテ良山ニ登リ歸路櫻尾  
邊ヲ歩シ稲作ノ不熟ヲ見テ大ニ感スル所アリ家ニ歸リ直  
ニ旅装ヲ整ヘ商機失フ可カラストテ晝夜兼行馬關ニ至リ  
直ニ玄米ヲ買ヒ付ケ大ニ利ヲ得タリ引續キ大豆砂糖ヲ  
買ヒ亦利ヲ得タリ遂ニ家業回復ノ端緒ヲ開クコトヲエタ

リ此時ニ當リ周平ノ妻某亦内助ノカラアリ奴婢ヲ解雇シ  
親ヲ薪水ノ勞ヲ採リ非常ノ節儉ヲ行ヒ其愛玩スル所ノ筭  
櫛衣類等ハ簞笥ト共ニ賣却シテ夫ノ商法ノ資金ニ充テタ  
リ是ヨリ次第ニ増殖シ遂ニ素封ノ富ヲ致セリ然ルニ此ノ  
時ニ當リ官財用匱乏士族ノ祿ヲ削リ商買ノ金ヲ課セリ周  
平ハ往年既ニ米札ノ爲メニ殆ント家ヲ亡サントシ今日再  
ヒ家ヲ起スニ至リ官又々調達銀先納銀等ヲ命ス若シ是カ  
爲メニ財産ヲ傾クルニ至ルハ遺憾ナレハ寧ロ久留米ヲ去  
リテ邊地ニ移住セントテ既ニ北野村ニ宅地ヲ相ス然レモ  
遂ニ移住ニハ至ラズ晩年ニ至リ嗣子昌平ニ遺訓シテ曰ク  
余ヤ創業殊ニ米札ノ爲メニ大抵資産ヲ失ヒタリ止コトヲ  
得ス危嶮ノ商業ヲ犯シ大利ヲ貪レリ汝等ニ於テハ然ル可

カラス守成ノ業ニテ余ノ蓄積セル資産ヲ保護スルヲ是レ  
勤ムヘシ同姓ニテハ往々資産ヲ失ヘリ今余カ家ニ於テ一  
歩ヲ過タハ必ス祖先ノ祀ヲ絶ツ可シ汝之ヲ忘ルコト勿  
レト世ノ變轉ハ人智ノ及ハサルモノアリ故ニ財産ハ一物  
ニ偏ス可ラス必ス確實ナル數株ノ物ニ分ツヘシト且又其  
子孫ニ遺セシ家訓ニ曰ク

家訓

- 一 御國恩ヲ忘レヌ御掟ヲ可相守事
- 一 先祖相承ノ家業正直ニ出精緻シ高利ヲ不可好事
- 附中祖道休居士淨寛居士ノ遺風ヲ慕ヒ真宗ノ教ヲ尊ミ家業ヲ勤ル  
ニ於テハ彌長久ノ基爲ル可シ
- 一家業ノ暇文武ノ心懸肝要ノ事
- 一無益ノ殺生ヲ不好愛憐ノ心深カル可キ事
- 一家内ハ勿論同姓中陸シク諸事申談一巳ノ義ヲ立間敷事

一 不慮ノ殃ニ掛リ産業衰ル時ハ一類申合可相救事

附親ノ心ニ違ヒ家内不熟或ハ非義ヲ企或ハ榮耀ニ誇ル時ハ異見ヲ  
加ヘ若不用時ハ此一系列タルヘカラス

一 先祖相承ノ田地重代ノ重器等無據賣拂時ハ一類中可遂相談事

右之條々堅ク相守質素ヲ本トシ正路ニ家業永ク相續可有之候仍テ如件

寛政十三年辛酉二月二十七日

昌平初メ朔之進ト稱レ後傳之進ト改ム父ノ遺訓ヲ守リ家  
産ヲ保護レ調達銀先納銀等若干ヲ上納セルヲ以テ竹ノ間  
組並ニ進ミ十五人扶持ヲ賜フ昌平モ亦嗣子ニ遺言シ父周  
平ノ創業艱難ノ際着用セシ古衣ヲ與ヘ益勤儉ヲ戒メタリ  
其子ヲ康平ト名ク傳之進ト稱ス爲人耐忍剛直能ク遺訓ヲ  
守リ勤儉ヲ以テシ一家ノ經濟ニハ最モ勉強セリ傍ヲ兵學  
ヲ好ム此時昇平ノ久シキ武備廢弛シ士族ニテ武器ヲ蓄フ

ル者甚々鮮シ康平武備ノ備ハラサルヲ歎シ官ニ請ヒ鐵砲  
五百挺ヲ獻セントス官代金ヲ促ス遂ニ田畑金員ヲ獻セリ  
自家ニハ十分ニ武器ヲ蓄ヘタリ此ノ時世上ノ狂歌ニ  
貧乏れハ志ち發おくれてたち刀

さむか武士うきはぬかい

對國公ノ時建白ノ書アリ其書中ニ武備ヲ修メ物産ヲ興ス  
等ノ語アリ前後田畑五十町歩金若干ヲ獻セリヲ以テ祿三  
百三十石ヲ賜フ大小性格ニ進ミ後會計大屬ニ任ス水野氏  
政權ヲ執ルノ時ニ至リ諸方ニ獻金ヲ促ス其最モ巨額ナル  
者ハ有馬一知一万五千兩トス遂ニ上納スル能ハス其次康  
平ノ一万兩トス康平ハ一時ニ上納ス凡ソ獻金ニハ必ス報  
酬アリ其報酬ニハ自家ノ格祿ヲ請ハスレテ親族三家ニ扶

持米ヲ賜フヲ請フ官乃々石原太田垂井三氏ニ扶持米三口  
宛ヲ賜フ康平ノ子ヲ應平ト名ク善次郎ト稱ス温厚篤實時  
勢變遷ノ際ニ遭逢レ弟常五郎ト戮力能ク祖訓ヲ守リ家産  
ヲ保護レ士族授産ノ爲メニ金千圓ヲ寄附セリ應平ノ子浩  
平作之進ト稱ス明治二十二年洪水ノ變ニ依リ大ニ改革ヲ  
行ヒ益々家門ノ永續ヲ圖レリ我カ久留米地方有馬氏入國  
以來豪族富家ト稱スル者鮮レトセス然レモ或ハ一世或ハ  
二三世ニレテ盛衰浮沉セサルモノアラサルハナレ然ルニ  
特ニ山本氏ハ周平勃興素封ノ富ヲ醸セリヨリ子孫其遺訓  
ヲ守リ五世百數十年始終一ノ如ク且ツ其始祖石原氏入國  
ノ時ヨリ殆ント三百年實ニ希世ノ名家地方ノ豪族ト稱セ  
サルヲ得ンヤ

林田寛道

林田寛道正助ト稱シ手津屋ト號ス竹野郡田主丸町ノ人也  
 初メ大坂ノ役城將ニ陷ラントス城中ニ薄田隼人正ト云者  
 アリ弟彈正勝春ヲシテ西海ニ至リ兵ヲ募ラシム兵集ルニ  
 及ンテ城已ニ陷ル勝春遂ニ筑前國上座郡林田村ニ留リ住  
 ス因テ氏トス後竹野郡奴田村ニ移ル其子孫ニ至リ四方ニ  
 離散ス其奴田村ニ在ル者終ニ庶人タリ清之助ニ至リ次子  
 助四郎ヲシテ別ニ田主丸町ニ住セシム是レ即テ寛道ノ祖  
 也助四郎貨殖ヲ事トシ家頗ル富ム一日大慈公出遊其家ニ  
 憩フ古金三兩ヲ賜フ其子亦助四郎ト稱ス即テ寛道ノ父也  
 家産稍微ナリ寛道ノ幼ナルニ母毎ニ三兩ノ古金ヲ示シテ  
 曰ク爾再ヒ家産ヲ挽回シ門巷ヲシテ君主ノ車馬ヲ容レン  
 メヨ此ニ於テ寛道奮激シテ曰ク予ノ祖浪華戰爭ノ時ニ當

リ身ヲ君ニ致セリ今其子孫ニシテ袖手スヘケンヤ然リト  
 雖今日昇平ニシテ祖考既ニ陶朱倚頓ノ道ヲ學ヒ貨殖ヲ事  
 トスレハ則テ予モ其志ヲ繼キ貨殖ヲ以テ功ヲ國君ニ致シ  
 因テ老母ノ心ヲ安セシメハ其或ハ忠孝ノ道ニ近カハツン  
 カ是ヨリ一意家産ヲ挽回スルヲ以テ事トシ其筑前地方ニ  
 油樽ヲ負ヒ行キレニ八丁越テ踰ユルニ及ヒ同行者ニテ山  
 ノ峻岨ナルヲ歎セシニ寛道曰ク余ハ然ラス此山猶峻岨ナ  
 ラサルヲ恨ム何トナレハ峻岨ナレハ人望ヲ絶ツ人望ヲ絶  
 テ而シテ我獨行スルニ非レハ大利ハ得難シト其後次第ニ  
 貨殖シ大坂ニ移住商店ヲ開クニ及ヒ寛道ノ名大坂坊間ニ  
 轟ケリ天ノ時ニ順ヒ地ノ利ニ因リ慮レハ屢々中リテ終ニ  
 衆封タリ大坂城監大久保加賀守其善ク家業ヲ勤ムルヲ嘉

ミシ白銀及ヒ年俸ヲ賜フ市監齋藤伯耆守黃金一枚及ヒ佩  
刀ヲ賜フ文化六年銀百貫目ヲ藩ニ獻ス因テ月俸五人口ヲ  
賜ヒ上下肩着用ヲ許ス七年大乘公ヨリ印籠ヲ賜フ十年金  
五千兩ヲ獻ス若津港ニ米廩ヲ建築シ久留米通町四丁目及  
ヒ田主丸町兩所ニ壯大ノ家屋ヲ建築セリ其構造ノ壯輪奐  
ノ美久留米市街中曾テ之ノナキ壯觀ナリ文政二年大船五  
艘若津米廩及ヒ通町四丁目家屋倉庫賣物百三十七貫目共  
ニ獻ス四年正月十一日切手三百七拾七貫目調達分目錄ヲ  
以テ獻ス大乘公數々其家ニ臨マル六年十月九日歿ス年六  
十一寬道爲人身幹短小ニシテ膽略アリ其商法ノ計畫ニ至  
リテハ人口ニ膽炙スルモノ多シ宜哉一世ニシテ素封ヲ致  
セシ事實寬道男子幼ナルヲ以テ親族道高ヲ養ヒ嗣トス又五

耶ト稱ス道高モ亦金貳千兩ヲ獻ス郷士籍ニ署シ月俸十人  
口ヲ賜フ天保元年大良公ノ昇進ヲ祝シ銀五十枚ヲ獻ス三  
年父寬道ノ實子正寬長セルヲ以テ家ヲ讓リ退居ス正寬九  
八耶ト稱ス四年金五千兩ヲ獻ス竹ノ間組並進ニシ月俸十  
五人口並ニ宅地ヲ櫛原ニ賜フ文久四年大小性ニ進ミ廩米  
百八十石ヲ賜フ慶應年中國學方助ニ任ス明治元年記錄役  
ニ任ス三年神事局司事ニ任ス獻金ノ命アリ金五千兩ヲ獻  
ス正寬和歌ヲ嗜ミ橘守部ヨリ守ノ字ヲ與ヘ守秋ト稱ス守  
秋ノ子ヲ守隆トス朴直ニシテ才幹アリ奥州ノ役箱館ニテ  
戰功アリ短刀ヲ賜フ大小性格ニ進ム後父祖ノ遺産ヲ守リ  
專ラ開墾牧畜ニ從事セリ  
野史氏曰寬道ノ智謀偉略其商法ニ於ケル猶古名將ノ兵法

富安善右衛門

ニ於ケルカ如シ籌ヲ運ラシ勝ヲ決スル意ノ如クナラサル  
 ハナシ宜ナル哉其類々奇功ヲ奏シ大利ヲ得ルコト然リ而  
 シテ其死地ニ陥リ大利ヲ得ル者ハ悉ク國家ノ急務ニ供セ  
 リ當時昇平ノ久レキ上下倫安士大夫タルモノ死ヲ以テ國  
 家ニ盡ス者鮮シ實ニ寬道ニ羞ツル者多シ  
 富安善右衛門ハ瀨下町ノ人也壯歲上妻郡福島町ニ往キ日  
 々酒樽ヲ負ヒ久留米市街ニ鬻クヲ以テ業トス其往來スル  
 ヤ必ス長徳村長延川ノ邊ニ憩ヒ歎シテ曰ク大丈夫他日志  
 テ得ハ必ス此處ニ造酒場ヲ建築セント年四十二ニシテ壯  
 大ナル造酒場ヲ長徳村ニ建築セリ專ラ造酒業ニ從事シ其  
 造酒ハ瀨下町ニテ販賣ス名酒ノ稱遠邇ニ聞ユ其貨殖富ヲ  
 致スニ及ヒ數々獻金調達セシテ以テ郷士籍ニ署シ月俸ヲ

賜フ二弟茂平ヲ日向山ト稱ス其鼻ノ隆起スルヲ以テナリ  
 三弟善兵衛ヲ豚善ト稱ス身體肥大ナルヲ以テナリ孰レモ  
 任俠ヲ以テ聞ユ善右衛門同時ニ貨殖ニ名アル者ハ松本又  
 右衛門上野喜平等皆獻金調達ヲ以テ郷士籍ニ署シ月俸ヲ  
 賜フ其他木屋水田屋等ノ如キ富商アリト雖子孫ニ至リテ  
 ハ往々衰微セリ

賢媛

賢媛ハ石井氏ノ節烈春林公ノ夫人松平連姫君ノ英邁靈源  
 公ノ夫人松平糸姫君ノ幽閑貞靜堀江善次ノ妻森氏ノ和歌  
 書ニ巧ナル狩野永雪ノ未亡人ノ家訓ノ嚴ナル北川亘ノ妻  
 狩野氏ノ貞實有馬泰賢ノ妻萩原氏ノ聰明強記等ヲ記セリ  
 石井氏ハ生葉郡吉井町大莊屋石井市之助ノ女ナリ弱年ニ

夫人石井氏



シテ星野村庄屋庄左衛門ノ男子某ニ嫁ス年十七歳ニシテ  
男子ヲ生ム尋テ夫某歿ス庄左衛門姪某ヲ養ヒ寡婦石井氏  
ニ配セントス石井氏肯セス實父母モ亦再醮ヲ促シテ較マ  
ス石井氏之ヲ拒ムヲ得ス遂ニ再醮ヲ許ス石井氏新夫ニ告  
ケテ曰ク舅姑既ニ老タリ幼孫ヲ育ス可ラス故ニ貴君ヲ養  
テ以テ妾ニ配スル者ハ舅姑ヲ保護シ幼子ヲ撫育セシメン  
トス今ヨリ以往貴君妾ヲ遇スルニ妹ヲ以テ妾ハ貴君  
ニ事フルニ兄ヲ以テセントス是ヲ以テ貴君夫婦ノ同衾ハ  
コレヲ許スアラント新夫コレヲ聞キ快トセス石井氏終ニ  
自刃レテ死ス後テ瓊林公其節烈ヲ感賞セラレ其實弟勘十  
郎ヲ拔擢セラレ兒小性ニ任ス

君夫人松平氏連 姫松平康直ノ女ニシテ德川家康公ノ甥ナ

君夫人松平氏

リ慶長三年六月春林公ニ嫁セラレタリ然ルニ此月德川氏  
上杉景勝ヲ征ス梅林公春林公從軍セラレ君夫人ヲ大坂邸  
ニ遣レ質トセラレ家臣吉田掃部梶原清太夫坪池和泉及ヒ  
古川新八内藤半右衛門等ヲレテ守護セシム石田三成等兵  
ヲ舉ントレ諸將拏テ大坂城内ニ收メテ質ト爲ントス兵ヲ  
諸將邸ニ遣ハレ之ヲ捕フ我藩邸モ戒心アリ家臣ニテモ評  
議セシニ古川新八ハ德川氏ヨリ君夫人へ附屬セシモノ内  
藤半右衛門ハ松平康直ノ家臣ナレハ猶更君夫人ヲ城中ニ  
入ルノ不可ナルヲ論レ君夫人ヲレテ脱去セシムルノ策  
ヲ決レ辻三太夫ハ航海ニ熟練セシテ以テ水路ヨリ脱去セ  
シメントス三太夫船ヲ鱧ノ魚店ノ主人ヲ誘ヒ船中ニ魚類  
ヲ堆積レ君夫人ヲ船底ニ潜居セシメ脱去セシムルノ策ヲ

家臣ヨリ老女平原へ申通レ平原ヨリ君夫人へ上申セシニ  
君夫人ニテ八年二十歳ヲ踰エス未タ弱年ニテオロシケレ  
ル老女ニ向ハレ申サレケルニハ留守居ヨリ申出アケレハ  
輕卒ニハフルマシケレト篤ト熟慮スルニ立蕃頭殿ノ城下  
遠江横須賀マテハ遠路ナレハ容易ニ相達レカタク父上法  
印ノ領地ハ播磨三木ナレハ路程遠キニ非サレト悉ク敵地  
ナレハ身ヲ隠スヘキ處ニアラス若シ大坂ヲ出テ他人ノ手  
ニ捕ハレ恥辱ヲ受ケンヨリハ此邸ニアリテ奉行ヨリノ命  
ナリトテ決シテ邸ヲ出テス奉行ヨリ強テ邸ヲ出テヨトア  
ラハ其時ハ自裁スヘキナリト申聞ケラレケレハ老女ハ其  
次第ヲ留守ノ人々ニ通セシニ留守ノ人々モ其言ノ理アル  
ヲ以テ其儘ニ任セオヤシニ終ニ城中へ引取りノトハナク

レテ濟ミタリトソ  
君夫人ノ江戸邸ニ在ルヤ公ヨリ金員借用ノ談判アリシニ  
君夫人ノ答ニハ公ハ八万石ヲ以テ十二万石ノ軍役ヲ官ニ  
請ハレタレハ其用意アルハ當然ノトナリ今些少ノ金員不  
足ヲ生シテハイカデカ十二万石ノ軍役勤マルヘキトテ貸  
與セラレサリケリ君夫人ノ英邁興國ノ氣象アリ創業ノ良  
主ニ偶隨シテ内助ノ功少カラサリシニト知ルヘレ  
君夫人松平氏ハ系姫讚岐高松城主松平頼重ノ女徳川光國卿ノ孫女ナリ  
ニシテ靈源公エ嫁セラレタリ君夫人幽閑貞靜公ニ嫁セラ  
ル未タ半期ナラス公薨ス君夫人深クコレヲ悲ニ國歌ヲ  
咏セラル

さのふまて千筋りぬてー黒髮城

今一に、夜に枕を殘し、  
みい、夜に枕を殘し、

十六歳ニテ落飾尼トナラセラレタリ其時老女ヨリ白木盆  
ニ落飾ノ黒髪ヲ束テ家老有馬左門ノ前ニ出セシニ左門ハ  
流涕レ頭ヲ上ル能ハストソ君夫人ハ遂ニ江戸小石川水戸  
邸ニ隠居セラレテ清操ヲ遂ケタル元祿十五年正月五日薨ス  
年四十九鎌倉英勝寺ニ葬ル清涼院殿讚譽知相大姉ト謚ス  
元祿年間伊豫松山藩士大高清介ノ妻某山城荒ノ城主稻葉氏ノ命ニヨリテ  
著ハシ、唐錦トイヘル書ノ第八卷寫繪ノ條ニ糸姫君(君夫人)ノ貞操ヲ詳カ  
ニ書記セリ世人ノ  
能ク知ル所ナリ

森氏

森氏佐知ト名ク森嘉善ノ妹ニレテ堀江善次ニ嫁ス嘉善ハ  
少ヨリ學ヲ好ミ廣津藍溪ニ從ヒ業ヲ問ヒ後熊山蕃山ノ書

ヲ讀ミ陽明學ヲ説キ邦乘外史内外醫方ヨリ以テ物産樹藝  
變説夷歌ノ微ニ至ルマテ凡ソ世人ノ講レテ一家ノ技ヲナ  
ス者略皆研究頗ル其奥ニ入レリ爲人溫雅言笑藹然戚族ヲ  
親ミ奴婢ヲ恤ム家政ノ美郷黨稱ス又交遊ヲ好ミ他邦遠地  
ノ人ト雖苟モ一能アレハ雅俗トナク必ス之ヲ愛ス是ニ於  
テ四方漫遊ノ徒往々米府ニ嘉善アルヲ知リ必ス留宿日ヲ  
經ル人或ハ其家計ヲ妨クルヲ論スレハ嘉善夷然トシテ顧  
ミス上州高山仲繩ノ西遊スルヤ亦嘉善ヲ以テ主トシ嘉善  
親愛甚タ厚レ居一年仲繩嘉善ノ家ニ於テ自ラ屠腹死ス事  
官裁ニ係リ即時ニ葬ルヲ得ス嘉善乃チ之ヲ家園中ニ殯ス  
ル數月此ノ時ニ當リ東西住復公私奔走嘉善則チ毫モ悔色  
ナシ獨リ仲繩ノ不幸ニレテ遠鬼タルヲ悲レミ常ニ躬ヲ其

墓ヲ洒掃シ香ヲ焚キ花ヲ供レ春秋祭祀衰ヘス嘉善ノ行事  
此ヲ觀テ其他推スベレ而シテ森氏モ亦才學アリ其幼ナル  
兄嘉善ト深更マテ對座讀書習字ヲ學ヘ、數年間一日ノ如  
シ尤モ和歌ヲ好ミ書ニ巧ナリ性質嚴正氣宇高尚平生机邊  
ニ端坐シ足庭園ヲ蹈マス其交際往來セシハ時ノ碩儒樺島  
石梁國卿有馬息焉等トス歌人尙平等モ書牘往復數篇ヲ存  
セリ咏艸ハ京師縉紳諸名家ニ就キ評點ヲ受ケタリ男子ヲ  
金兵衛ト稱ス溫厚篤實亦學ヲ嗜ミ明善堂教授ニ任ス家庭  
教育ノ致ス所ナリ森氏文政十三年二月十四日歿ス年七十  
四

述 懷

ふみゆえに人乃 歎く 憂も 憂か けし

ゆゑり 過行を 一 次 一 ぞおとふ

名所花

ゆゑり 表乃 まぢかゝら 終を じり乃 山

よゝみ おせえの 花乃 ぬみ見や

待郭公

よみ 終乃 頃を 空乃 志り 終から

まよぬよ 終乃 表山 終を しま

えゝ 君よ ぬみ まはる

あせり つぎもの あり 終は、有しよ 終

戀し ぬみ まよ 終ぬる い 終を せ

まゝの 見ことよ ぬみ まつる

三十三とせ 跡とふ 終乃 一日 ぬり

某氏

某氏狩野永雪ノ妻ナリ永雪歿レテ早ク寡ナリ其家世々繪  
 事ヲ以テ祿ヲ食ミ名家ト稱ス子ノ永錫幼ニレテ孤ナリ未  
 亡人專ラ家事ヲ治ム永錫幼ヨリ樺島石梁ト親善シ筆研ヲ  
 共ニレ同窓ニ書ヲ讀ム未亡人紡績ノ暇夙夜旁ヲヨリ二人  
 ノ業ヲ課レ二人ノ游息嬉戯苟モ一善アレハ必ス喜ンテ之  
 ヲ獎メ一不善アレハ必ス怒テ之ヲ戒レム一揚一抑至誠ニ  
 出テサルハナレ十餘年一日ノ如ク永錫既ニ長レ益其家技  
 ヲ修ム其術益精ク其識愈高ク其名藉々四方ニ發ス寸絹尺  
 紙モ之ヲ珍トレ之ヲ寶トセサルハナキニ至レリ未亡人居  
 恒欣然トレテ曰ク愚婦敢テ昔人斷機ノ高キヲ望マスト雖  
 兒ヤ今日アル今ニレテ後我レ地下ニ瞑スヘント

狩野氏

狩野氏名スカト狩野永錫ノ女ニレテ北川亘ノ妻ナリ其ノ亘  
 ニ嫁セシヨリ亘ニ事フル貞實ナリ其實子ナキヲ以テ松岡  
 友記ノ二男外波ヲ養ヒ子トスルニ及ヒテ養父亘ヨリ或ハ  
 不法ヲ以テ遇セシニ狩野氏必ス中間ニ立テ之ヲ和解シ遂  
 ニ一家逆境ニ至ラシメス亘歿シ寡婦タルニ及ヒテ外波顯  
 要ノ地ニ登リ一家隆盛子孫繁榮ナルニ及ヒ家内一ノ間言  
 アルヲナレ且ツ女工ニ長シ尤モ裁縫ニ巧ミナリ兼テ和歌  
 ヲ嗜メリ文久三年十月十一日歿ス壽八十二苧扱川町無量  
 寺ニ葬ル其辭世ノ和歌ニ曰ク  
 今をてまよふ心ハ何ら山  
 ちりゆく花を身たたくひねる  
 萩原氏ハ萩原員幹ノ女ニレテ有馬泰賢ノ妻ナリ寛政元年

萩原氏

某日生ル明治十六年一月二十一日歿ス年八十四梅林寺ニ  
葬ル荻原氏天資嚴正聰明強記暇アレハ讀書古今沿革ノ大  
ヨリ瑣末雜碎ノ小ニ至ルマテ歷々臆ニ在リ其嫁スルヤ敢  
テ門地ヲ以テ夫家ニ加ヘス其自ラ持スルヤ儉素精苦人ノ  
堪ヘサル所ナリ泰賢ノ卒スルヤ泰秋甫五歲嫡孫ヲ以テ家  
ヲ繼キ家世々四千石ヲ食ミ貴戚卿タリ家臣頗ル多レ荻原  
氏孤ヲ擁レ家ニ當リ祭祀賓客慶吊間遺事大小トナク皆ナ  
荻原氏ニ稟ス其區處井然咸ナ其宜ヲ得タリ其孫泰秋ヲ育  
スルヤ甚々之ヲ愛スト雖之ヲ教ユル事々規矩ヲ循蹈ス其  
最モ心思ノ注ク所慎テ家法ヲ守ルニ在リ纖毫ト雖敢テ損  
益セス泰秋ノ長スルヲ待テ遺物ヲ奉レ之ヲ授ク家政ヲ總  
フル殆ント二十年内外噴々頗ル賢婦人ノ稱アリ明治革政

ノ時ニ當リ年既ニ七十有餘家臣去テ農商ニ歸ス不幸ニレ  
テ家計豐ナラス是ヲ以テ衆妾左右ニ侍レ日暝テ致レテ以  
テ寢食ヲ安ニスルヲ得ス詔ニ曰天祐吉人此人ニシテ如此  
天其レ必ス可ケンヤ然レモ外物身ヲ奉スル者ニ於テ一モ  
嗜ム所ナレ獨自ヲ裁縫レ涎衣貨包帽巾ノ類舊臣伺候スル  
モノアレハ之ヲ賜ヒ歡語良之ヲ久ス且自ラ花艸ヲ裁ユ和  
歌ヲ咏ス文久年中泰秋ノ未ダ幼ナリレ頃咏セラレ一日家  
臣ニ示サレタリ

いやはたふー此動るはも哉

其志操想見スヘレ曾孫二人アリ荻原氏年八十ヲ過キ猶能  
ク諄々戒飾レテ以テ他日家聲ノ興ルヲ待ツ其意亦悲レム

可レ

名僧智識

名僧智識ハ高良山隆慶良寛麟圭等ハ座主職トナリ妻帯レ  
 戰伐ヲ事トレ勇威ヲ振フ麟圭ノ末子秀虎丸出家レテ尊能  
 ト號ス清僧トナル寂源博學文章德望夙ニ彰ハル台學ヲ傳  
 フ聖光ハ建久八年法然ニ見ニ念佛ノ奥立ヲ開キ一宗ノ深  
 奥ヲ究極ス元久元年井上山普導寺ヲ創建レ筑紫本山トス  
 然阿ハ聖光ノ後ヲ繼キ普導寺ニ住ス然郭ハ竹野郡石垣村  
 觀音寺ノ別當職ナリ建久中天台ノ教觀ヲ修ム古月ハ福聚  
 寺ノ開祖ナリ生キテ生キス滅レテ滅セス禪林ノ軌範ト謂  
 ツヘレ憲幢ハ梅林寺ノ住職ナリ學識アリ初テ禪堂ヲ起レ  
 參禪ス羅山同寺ノ住職ナリ病ノ劇ナルヤ病ヤ得生ヤ得死

隆慶

ヤ得唯此ノ境界正是好時節容貌魁偉尤禪學ニ通ス微定ハ  
 久留米西岸寺ニ入り後西京ニ出テ儒佛ヲ講習ス江戸増上  
 寺順應寮ニ就キ後處々ニ移住レ終ニ智恩院ニ住ス佛學ヲ  
 究極シ詩文ニ通ス著書若干卷後寺院ヲ巡回久留米西岸寺  
 宗安寺等ニ住レ名古屋ニ於テ示寂ス  
 隆慶ハ武内宿稱ノ後裔武見麻呂保依出家レテ高良山ノ座  
 主ノ鼻祖ト成レリ天台ノ玄旨ヲ究メ鎮西ノ講師タリ山中  
 ニ高隆寺ヲ創建レ住院ス養老年中遷化ス  
 良寛ハ玉垂神社ノ神宮寺日光院ノ別當タリ大保保常ト高  
 良山東光寺ノ城ニ據テ豊後大友氏ニ通レ戰伐ヲ事トレ勇  
 威ヲ振フ豊臣氏西征ノ時良寛陰謀アルヲ以テ竟ニ領地ヲ  
 沒收セラル

良寛

麟圭

麟圭良寛ノ弟ニシテ天正年中久留米城ニ據レリ良寛ト隙アリ圭遂ニ寛ヲ伐テ自立高良山ノ座主タリ久留米城主毛利秀包ト隙アリ秀包僞リ和レ麟圭父子ヲ殺ス文祿中朝鮮宴饗ス歸途伏テ柳原ニ設ケテ麟圭父子ヲ殺ス文祿中朝鮮ノ役秀包悪夢ニ感セレテ以テ麟圭ノ末子秀虎丸ノ肥前ニ在ルヲ呼返レ座主職トレ千石ヲ寄附ス秀虎丸出家レテ尊能ト號ス台學ヲ研究レ清僧トナル僧正ニ歷任セリ寂源又一如ト稱ス高良山神宮寺三井寺ノ座主ニシテ博學文章德望夙ニ彰ハル書ハ賀茂家ノ筆意ヲ得又和歌ヲ善クシ高良山十景ノ題ヲ撰ヒ詩歌ヲ縉紳名流ニ請テ神庫ニ藏ス當山境域ニ杉數万株ヲ植ウ後世良材トナレリ聖光又辨長或ハ辨阿ト號ス筑前香月莊古川彈正左衛門則

寂源

聖光

然阿

茂入道順乘カ子左衛門尉則治ノ弟ナリ幼ニシテ聰敏長シテ博識多才台學ヲ修ム建久八年聖光年三十六洛東ノ吉水ニ往テ法然ニ見ユ淨土念佛ノ奥玄ヲ聞キ凡夫解脱ノ直路ハ淨土念佛ノ要行ニシカスト信シ因テ法然ヲ師トレ研究スルヲ六年竟ニ一宗ノ深奥ヲ究極ス元久元年吉水ヲ辭シテ鎮西ニ歸リ淨土念佛ヲ弘ム御井郡府中町厨寺ニ於テ一千日ノ念佛ヲ修ム其後井上山善導寺ヲ創建シ筑紫ノ本山トス嘉禎四年二月二十九日同寺ニ病寂ス然阿參議藤原頼定ノ男名ハ良忠石見ニ由ル淨土六派ノ祖ニシテ井上山善導寺第二世ノ住僧ナリ後年相模鎌倉ニ至ル北條時宗尊信シ鎌倉ニ光明寺ヲ創建シテ開山トス弘安十年年八十九同所ニ寂ス永仁元年勅シテ記主禪師ノ謚號



然廊

ヲ賜フ上妻郡馬場村天福寺ノ古趾ニ禪師ノ石碑アリ  
然廊ハ竹野郡石垣村觀音寺ノ別當職ナリ觀音寺ハ和銅中  
僧行基ノ創建スル所ナリ東北ハ則箕尾葦城ノ高嶽ニ倚リ  
西南ハ則北筑西肥ノ曠野ニ控シ茂林脩竹翠色滴ルカ如シ  
横溪長河水光白練ノ如シ眞ニ地方ノ名藍ナリ建久中然廊  
當職ニ補ス天台ノ教觀ヲ修ム當寺ノ中興ナリ後退職後吉  
水禪房ニ就キ淨土法門ニ歸ス名ヲ金光ト改ム宗祖圓光ノ  
上足ナリ金光圓光ニ親炙淨土ノ蓋奧ヲ究ム故ヲ以テ圓光  
金光ニ命シテ奧羽地方ヲ行化セシム其故跡今尙東奥ノ間  
ニ存ス津輕郡弘前貞昌寺ハ該地第一ノ巨刹ナリ塔頭ニ金  
光ノ故蹟アリ今尙金光護持ノ佛像及ヒ袈裟念珠ヲ存ス又  
弘前ヲ距ル五里許浪岡村西光院ノ側ニ金光ノ墳墓アリ石

碣大小八基ヲ邱阜上ニ立ツ其崇敬知ルヘシ銘ニ曰黃蓮社  
良萃金光上人建保五年丁丑五月二十五日示寂享年六十三  
又陸奥栗原郡住生寺ハ金光田夫變牛者ヲ教化スルノ地ニ  
シテ宗祖圓光ノ等身塑像ヲ安置シ香火ニ供スル者今ニ至  
リテ繼踵ス嗣法系ニ云蓋シ奧羽ノ庶民念佛門ニ歸シ安心  
立命ノ旨ヲ知ル者金光布教傳道ノ力ニ歸ル師命ヲ辱レシ  
スト謂ツヘシ圓光嘗テ親盛ニ語テ曰ク本宗ノ骨髓ヲ得ル  
者ハ僅カニ聖光金光勢觀アルノミ其圓光ノ重セシコト此  
ノ如シ聖光鎮西ニ教化シ勢觀蹟ヲ京師ニ繼キ金光功ヲ東  
北ニ立テ鼎峙シテ吉水ノ法幢ヲ輔翼シ竟ニ万禩不刊ノ洪  
業ヲ開ク豈菩薩願輪ヲ駕スルノ功ニ匪ルヲ得ンヤ觀音寺  
ノ後山金光ノ古碣アリ苔蝕字ヲ沒ス文庫ニ乾陁色九條袈

古月

袈一領拂子一柄ヲ藏ス共ニ金光ノ遺物ト云  
 古月諱ハ禪林慈雲山福聚寺ノ開祖也日向國那珂郡佐賀利  
 村金丸某ノ男ニシテ寛文七年九月十二日生ル幼ニシテ嬉  
 戯不群十歳ニシテ出家ス松岩一道棟公ニ從ヒ業ヲ習フ十  
 七歳ニシテ楞嚴經ヲ閱シ大ニ感激シ既ニ弱冠ヲ超ユ偏ク  
 諸師ノ門ニ遊ヒ後豊後ノ賢岩悦公ニ見エ勇猛精進寢食俱  
 ニ忘ル脚席ニ着カス悦公ヲ辭シ竟ニ紀南海藏寺ニ寓ス大  
 光英山哲山既ニ老ス古月ヲ召レ返レ大光ヲ董レ一道棟公  
 ヲ嗣法シ新タニ茅菴ヲ結フ知又軒ト號シ終焉ノ計ヲナス  
 曾テ大般若經六百卷ヲ筆寫ス享保中島津惟久廩米五十石  
 山林若干ヲ賜フ惟久命シテ知又軒ヲ修メ寺ヲ營ミ堂宇廊  
 廡備ル天壽山自得寺是也寛保年中大慈公慈雲山福聚寺ヲ

憲幢

創始シ古月ヲ請テ開祖トス堂宇廊廡ヲ經營シ廩米二百五  
 十石ヲ賜公古月ノ壽像二幅ヲ撰シ古月ヲシテ自ラ讚セシ  
 メ一テ福聚寺ニ一テ自得寺ニ賜フ公ノ尊敬至ラサル所ナ  
 シ寶曆二年五月二十五日子中刻泊然入寂ス世壽八十五法  
 ニ依リ茶毘ス舍利十餘顆ヲ得方ニ葬ル公賻銀若干ヲ賜フ  
 古月始メ大光ニ住シ福聚ニ終ル中間四十餘年衲子ヲ錫鈍  
 シ士庶ヲ利濟スル者及ヒ諸刹ノ請ニ應シ法要ヲ提唱スル  
 者枚擧ス可ラス其レ生テ生キス滅テ滅セス禪林ノ軌範ト  
 謂ツヘシ其道闡闢ス可ラス其德測量ス可ラス万世ヲ亘リ  
 テ遷ラサル者ハ其レ道德カ公碑ヲ建テ千古ニ表章ス  
 憲幢ハ四筑後上妻郡本分村ノ人ニシテ梅林寺ノ住職ナリ禪  
 理ニ通シ道德一世ニ高シ同寺ニ初メテ禪堂ヲ設ケ徒弟ヲ

古月

裘一領拂子一柄ヲ藏ス共ニ金光ノ遺物ト云  
 古月諱ハ禪林慈雲山福聚寺ノ開祖也日向國那珂郡佐賀利  
 村金丸某ノ男ニシテ寛文七年九月十二日生ル幼ニシテ嬉  
 戲不群十歳ニシテ出家ス松岩一道棟公ニ從ヒ業ヲ習フ十  
 七歳ニシテ楞嚴經ヲ閱シ大ニ感激シ既ニ弱冠ヲ超エ偏ク  
 諸師ノ門ニ遊ヒ後豊後ノ賢岩悦公ニ見エ勇猛精進寢食俱  
 ニ忘ル脚席ニ着カス悦公ヲ辭シ竟ニ紀南海藏寺ニ寓ス大  
 光英山哲山既ニ老ス古月ヲ召シ返シ大光ヲ董シ一道棟公  
 ナ嗣法シ新タニ茅菴ヲ結フ知又軒ト號シ終焉ノ計ヲナス  
 曾テ大般若經六百卷ヲ筆寫ス享保中島津惟久廩米五十石  
 山林若干ヲ賜フ惟久命シテ知又軒ヲ修メ寺ヲ營ミ堂宇廊  
 廡備ル天壽山自得寺是也寛保年中大慈公慈雲山福聚寺ヲ

憲幢

創始シ古月ヲ請テ開祖トス堂宇廊廡ヲ經營シ廩米二百五  
 十石ヲ賜公古月ノ壽像二幅ヲ撰シ古月ヲシテ自ラ讚セル  
 メ一ヲ福聚寺ニ一ヲ自得寺ニ賜フ公ノ尊敬至ラサル所ナ  
 シ寶曆二年五月二十五日子中刻泊然入寂ス世壽八十五法  
 ニ依リ荼毘ス舍利十餘顆ヲ得方ニ葬ル公賻銀若干ヲ賜フ  
 古月始メ大光ニ住シ福聚ニ終ル中間四十餘年衲子ヲ錥鎚  
 シ士庶ヲ利濟スル者及ヒ諸刹ノ請ニ應シ法要ヲ提唱スル  
 者枚擧ス可ラス其レ生テ生キス滅テ滅セス禪林ノ軌範ト  
 謂ツヘシ其道闊闊ス可ラス其德測量ス可ラス万世ヲ亘リ  
 テ遷ラサル者ハ其レ道德カ公碑ヲ建テ千古ニ表章ス  
 憲幢ハ筑後上妻郡本分村ノ人ニシテ梅林寺ノ住職ナリ禪  
 理ニ通シ道德一世ニ高シ同寺ニ初メテ禪堂ヲ設ケ徒弟ヲ

集ノ參禪悟導ス晚年古卿話ノ一冊ヲ著シ禪理ヲシテ衆人ニ曉サシム其語奇峻警拔筑前千涯和尚ト最親善ナリ梅花ノ盆栽ヲ愛セリ夏月ニ至リ毎夕盆中ニ水ヲ注ク時ニハ躬親ヲ注ケリ賓客來リテ妨クルアルヲ以テ裸体ニテ禪ヲ脱セリ其真率如此ト云

羅山

羅山諱ハ元磨遠江ノ人ナリ幼ニシテ出家嶄然超卓晨昏禪ヲ學フ僅カニ昏沉ヲ覺フ即テ線香點火之ヲ把リ屹立ス以テ自ラ警シム遊方ニ追ンテ備前ノ泉滿禪師ニ依リ曹源未タ久シカラス禪師寂ス今佛國興政禪師席ヲ嗣ク兩禪師座下ニ持シ參究數年殆ント寢食ヲ忘ル一日忽然省ルアリ自ラ足ヲサシムルヲ以テ轉參止マラス受業歸テ促スニ會レ遠ク遁レ肥後ニ抵リ此神機妙用禪師見性ニ講ス爐鞴初亦鎚鍊譬

作羅山直ニ之ニ歸ス禪師一見器許鍛々其ノ力ヲ調ス羅山又日夜精練遂ニ古今諸訛ノ因緣ヲ極ム初メ羅山ノ見性ヲ見ル惟タ同參數輩アリ江湖羅山ノ此ニ在ルヲ聞キ風ニ臨ミ來リ趨ケ故ニ見性門下羅山ヲ以テ先登トス然レテ復タ受業之ヲ知り招キ還ス羅山止ムコトヲ得ス之ニ隨フ是歲梅林悅堂戒公示寂ス同門羅山密ニ其印記ヲ佩フルヲ以テ招請ス梅林ニ主トス羅山大法重寄讓ル可カラサルヲ以テ之ニ隨フ實ニ天保十五年也其秋本山授クルニ第一座ノ職位ヲ以テス朝廷玉鳳塔主ノ綸旨ヲ賜フ羅山既ニ梅林ニ住ス舉宗乘應接來者事大体ヲ推レ細故ニ拘ラス是ニ於テ江湖龜侶競先輻湊衆常ニ七十餘名ニ及フ羅山克家自然猶妙用禪師ヲ訪問レ其化ヲ佐ク我ハ討論世要ニ應ス万延元



年三月再ヒ綸命ヲ奉シ視蒙法山天使臨筵四衆向道即日恩  
ヲ謝シ參内 天顔ヲ拜ス皆例ニ隨フ而レテ德輝益著ル出  
世後日課作務衆ト勞苦ヲ共ニス遊方ノ日ニ異ナラス後病  
ヲ以テ寺事ヲ謝レ慶應元年遂ニ梅林席法ヲ嗣文奕ニ讓リ  
臨川亭ニ屏居ス惟タ提誨無倦住持ノ時ヨリモ嚴ナリ三年  
春病劇ナリ二月八日ニ至リ諸徒ヲ召シ一々遺囑シ諄々殆  
ント平日ニ過グ諸徒或ハ感泣セル者アリ且奕無學ニ謂テ  
曰ク老僧今日修行ノ力ヲ知ル百體裂クカ如レ是レ好箇時  
節事了ス又傷ヲ書レテ曰ク

通身是病通身藥屣撒梵天白汗流末後何須荷柳標千峰万  
壑絕蹤由

書レ畢リ復タ曰ク病也得生也得死也得唯タ此ノ境界正ニ

是レ好時節汝等日夜緘默自省スベシ同月十六日日出ノ時  
泊然化世壽五十三法獵若干容貌魁端嚴豐重燕坐ノ時ト雖  
儼トレテ衆ニ臨ムカ如レ目光炯々見ル者親レミ易カラサ  
ルカ如レ其誨言ヲ聞クニ及ンテ温々春ノ如レ咸ナ心醉レ  
テ去ル

徹定

徹定松翁ト號レ又古溪ト號ス法號ハ瑞蓮順譽トス父ハ久  
留米藩士鶴飼万五郎母ハ久保氏文化十一年三月十五日生  
ル文政二年三月八日瀬下町西岸寺光譽禪龍和尚ノ室ニ授  
ス年甫メテ六歳ナリ十年西京ニ至リ儒佛ヲ講習ス天保三  
年十一月江戸増上寺順應寮ニ就キ五重宗法ヲ受ク五年十  
一月宗脈ヲ廩承ス十三年寮ヲ新谷ニ司トリ一字班ニ進ム  
嘉永五年京都及ヒ奈良ニ遊ヒ高麗藏經ヲ膽寫レ及ヒ西魏

隋唐古經和銅養老天平以來ノ古寫經若干卷ヲ購求ス安政  
二年十月月行事班ニ進ム文久元年四月二十四日武藏岩槻  
淨國寺ニ住ス幕府葵章袈裟ヲ賜フ明治元年二月命アリ西  
上幕府ノ爲メニ罪ヲ謝シ大政官ニ哀訴ス五年教部省ノ徵  
ニ應シ十等出仕權少教正ニ補ス式日參朝ス六月二十四日  
命アリ江戸淺艸誓願寺ニ移住ス權大教正ニ補ス又命アリ  
小石川傳通院ニ移住ス七年命アリ京都東山智恩院ニ移住  
ス大教正ニ補ス九年七月大教院ヲ智恩院ニ移ス尾張ニ請  
ヒ明板大藏經ヲ求ム十年九月末寺ヲ召集シ會議ヲ開キ總  
本山ノ事務ヲ改正ス十三年三月徒弟某ヲ派出シ一字ヲ隱  
岐國西郷港ニ建ツ闡隆寺ト號ス又莊嚴寺專念寺西明寺及  
ヒ說教所五宇ヲ建ツ此歲華頂學校工事ヲ創シ十五年四

月華頂學校落成ス十六年三月東京淺草幡隨意院ノ住職ヲ  
兼務ス是歲鹿兒島不斷光院落成ス慶贊法會ヲ修ム十七年  
七月自ラ墓碣ヲ智恩院ノ後山ニ建ツ十九年一月十一日門  
跡號ヲ賜フ二十年智恩院ヲ以テ永世本宗管長寺ト爲スノ  
命アリ四月二日辭表ヲ奉リ退院ス塔頭福壽院ニ移ル二十  
一年筑後寺院ヲ巡回シ遂ニ瀬下西岸寺ニ寓ス二十三年二  
月信徒ノ請ニ應シ寺町宗安寺ニ寓ス二十四年二月十五日  
愛知縣下ヲ巡回ス偶病ニ罹リ法務一日モ怠ルナレ十九日  
建中寺ニ於テ侯爵德川義禮侯ニ講ス侯書ヲ徹定ニ求ム徹  
定書シテ以テ贈ル三月五日京都各宗洪濟會幹事來見ス三  
條内府公追吊會宣疏ヲ請フ之ヲ撰ム十五日名古屋阿彌陀  
堂ニ示寂ス翌十六日金城ノ西南笈瀨ニ荼毘ス世壽七十有

八微定性音律ヲ好ミ愛石ノ癖アリ其著ス所關邪管見關邪  
集佛法不可斥論笑部論十二問答等二十種アリ詩文集モ亦  
十卷アリ

久留米小史卷之二十二終

明治廿八年十二月十日印刷  
全 年十二月十八日發行



定價金貳拾五錢

福岡縣筑後國久留米市莊島町七十八番地

著作者 戶田乾吉

全縣全國三潞郡鳥飼村大字大石百四十七番地

發行者 宮原直太郎

全縣全國全郡全村大字白山五百三番地

印刷者 荒卷宗

全縣全國久留米市三本松町七番地

印刷所 株式會社 觀文社



